

仮面ライダーエグゼイド  
Fatal Death Game  
SAO

パラドファン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

《ホロウ・フラグメント編》

電脳救命センター通称CR所属のドクター仮面ライダーエグゼイド宝条永夢は、ゲームソードアート・オンラインに閉じ込められたプレイヤーを救うべく戦っている。

この物語はアインクラッド100層まで物語である。

# 目次

ホロウ・フラグメント編

プロローグ | 1

Mystery placeと少女

5

適正テストをBreakthrough

hせよ | 15

これまでのEvent | 40

Purpleの少女 | 75

PARA-DXのボス戦 | 85

謎のPendant | 102

AREA BOSSへの挑戦 | 114

Statement 《シャドウ・ファ

ンタズム》 | 132

短編など

特別回 | 141

特別企画平成ジェネレーションズF0

rever公開記念回 前半編 | 155



# ホロウ・フラグメント編 プロローグ

——激戦の火蓋が切られた。

永夢らと相対するヒースクリフは、これが六千の命を懸けた一戦だという気概がまるでない。

だが、キリトにはそれがある——違いが出るとすれば、ここか。

「ハアアアアアツ!!」

「おい、キリト!」

永夢と共にヒースクリフと打ち合っていたキリトが、急に剣速を上げた。

そこで、人数差の有利で息を合わせ連携していたというアドバンテージが一気に崩れる。

「ふっ……」

それを見逃すヒースクリフではなかった。

次第に、永夢とキリトの二人を押し返し始めた。

（くっ……弄ばれてるのか!）

キリトは焦った。勝負を急がねばヒースクリフには勝てないと悟ったからだ。

「だああああ!!」

ソードスキルを起動させるキリト。

対し、ヒースクリフはニヤリと笑みを溢す。

「キリトっ!」

更に、それに焦った永夢も同じく必殺技を起動させる。

「セヤああああああ!!」

永夢とキリト、互いに無数の連打を打ち込む。

が、ヒースクリフの完璧なまでの防御は崩すことができない。

「あっ……」

漏れ出た声はキリトだ。キリトが両の手にする二つの剣からソードスキルの閃光が途切れ、動きが止まる。

(ここで硬直かよ!?)

永夢はフォローに入るべく、我武者羅に剣を振るうが、そんな動きではヒースクリフには通じない。

「まずった!」

剣が弾かれ、ヒースクリフの視線がキリトへと向く。

身を引き、いつでもキリトを突き殺すことの出来る体勢だ——しかし

「——っ!？」

一瞬の時間の断絶する感覚の後、ヒースクリフが初めて驚きの表情を見せる。

よく見れば、ヒースクリフのアバターを形成するポリゴンがところどころで不安定になっっている。

「っちい!」

一瞬の判断でヒースクリフが飛び退く。

直後に、技後硬直から回復したキリトがヒースクリフの不調を好機とみて攻め立てる。

「ぬアアアアア!!」

——連打、連打、連打。

キリトの猛攻はヒースクリフの鉄壁の守りを徐々に崩していく。

「うおおおお!!」

猛烈な二刀での斬り上げが、遂にヒースクリフの防御を跳ね上げた。

「行けッ、キリト!!」

「だああああ!!!」

叫びとともに、左の一刀——ダークリパルサーによる突きがヒースクリフの胸元に深

く突き刺さる。

瞬間、空間が二つに割れ、割れた空間の裂け目にヒースクリフが飲まれる。

「どうなった……」

空間が元に戻った時には、既にヒースクリフの姿はなかった。

「……終わった、のか？」

呆然と呟くキリト。そんな彼に縋るように抱き付くのは、彼の添い人であるアスナだ。

「キリト君っ！」

「アスナ……」

「バカバカバカッ!! ほんとよかった、キリト君……キリト君……」

縋りながら、嗚咽交じりに安堵の言葉を吐き続けるアスナに、キリトは安心させるように言葉を紡ぐ。

「ごめん、アスナ……。でも、生きてるよ、俺……」

「うん……よかった……キリト君、生きてる……本当によかった……」



## M y e s t r y    p l a c e と少女

ヒースクリフが姿を消して以後、結局SAOはクリアとならず次なる層である七十六層に上がったエムら攻略組。

すると、システムエラーかステータスや武器の一部がロックされ、終いには七十六層以下の層に降りることができなくなるという重篤なバグに見舞われてしまう。

仲間と合流する中で迷宮区を探索していたキリトとエムは、突如謎のシステム音声とともに光に包まれる。

「……………」

光が消えると、二人がいたのは元の迷宮区内部ではなく木に覆われた森の中。

状況を掴むために探索を開始した二人だったが、突如と駆けてきたプレイヤーを避けることができずにエムがそのプレイヤーとぶつかり、大きく吹っ飛んだ。

「うぐっ……………」

「エムー！」

キリトはエムの方に駆け付けようとするが、エムとぶつかったプレイヤーが短剣を抜いたのを見て、即座に自身も背中中の剣を抜く。

「んっ……!」

キリトは短剣の一、二撃目を素早くかわすと、右手の片手剣でプレイヤーに攻撃を入れる。

「キリト君!」

攻防が始まり数瞬、エムはふと短剣プレイヤーのカーソルを見て驚愕した。

「オレンジカーソル!?!」

オレンジカーソルとは、犯罪行為をしたプレイヤーに等しく宣告される犯罪者の証。

エムはストレージを操作し、ドライバーとガシヤットを出現させてドライバーを腰に装着する。

「……行くぜ」

意識を僕から俺に切り替え、ガシヤットの起動ボタンを押す。

『マイティアアクションX』

音声とともにゲームエリアが展開され、背後のゲーム画面からチョコブロックが辺りに散らばる。

「大変身!」

掛け声とともにガシヤットをベルトの挿入口にセットする。

『ガシヤット』

そして、レバーを握り勢いよく展開する。

『ガッチャーン レベルアップ!』

そして周囲にセレクトパネルが展開されたので、エグゼイドの画面を右手で選択する。

『マイティジャンプ! マイティキック! マイティマイティアクションX!』

エフェクトに包まれ。音声が終わるとエムのは仮面ライダーエグゼイドに変身を果たす。

『ガシヤコンプレイカー!』

エムはガシヤコンプレイカーを取り出して、オレンジプレイヤーにへと振りかざす。

——が、オレンジプレイヤーはそれを後へ飛んで回避する。

「っ!? 女の子……?」

キリトがそう漏らす。

オレンジプレイヤーが回避した際にその全身を覆っていたフードが、エムの剣に巻き込まれ耐久力限界により壊れたのだ。

姿を見せたのは、明るい茶髪をショートにした軽装で盗賊装備の女の子だった。

「あんだ達……何物?」

「それはこっちのセリフだ……!」

彼女の問いに、そうエムが返す。

互いに踏み込めず、膠着する場。

——その時だ。上空から巨大な影が落ちてきて、エムとキリトそしてオレンジプレイヤーは一気に飛び退く。

「なっ!?!」

「こいつは……」

落ちてきたのは、巨大な鎌を持ち全身骨だらけの百足の様な姿をしたモンスター。——つまり、

「スカル、リーパー……」

「なんで俺達が倒したボスが此処にいるんだ!?!」

「リスポンしたのか……?」

多くの犠牲を出しながらも倒した最悪の前に、呆然とする二人。

「何なの……コイツ」

余りに巨大な敵の前に、オレンジプレイヤーも驚愕を隠せない。そんな彼女を狙い骨百足は巨大な鎌を振り落とす。

「危ない!」

咄嗟に身体が動き、エムはオレンジプレイヤーを庇うべく走り出す。

『マツスル化』

偶然近くにあつたエナジーアイテムを引き、パワーを上げたエムは骨百足の攻撃を力任せに弾く。

「何故、助けたの……?」

オレンジプレイヤーが呆然と問うてくるが、エムの答えはいつだつて変わらない。

「目の前で奪われそうになる命を見捨てることなんて、俺にはできないからな」

それはエムの、ドクターとしての信念であつた。

「エム！ 大丈夫か!？」

「ああ、大丈夫だ。レベル2で受けはした。こいつは元のフロアボスより弱く設定されてるな」

そのままエムは骨百足に向かっていき、キリトはオレンジプレイヤーに視線を向ける。

「その君！ あいつを倒すのを手伝ってくれ！」

対して、オレンジプレイヤーの彼女は未だ呆然としたままだ。

「なんで、あなたたちは見ず知らずのプレイヤーを助けるの。後ろから斬られるかも知れないのに……」

「俺達はキミに恨まれる事はしてないんだけどな。それにさっきエムに助けられたとき、キミは斬りかかってこなかった。君もこんなところで死にたくはないだろ？」

キリトの言葉に彼女も一瞬思案して、すぐに頷いた。

「……解った、協力してあげる」

その答えに、キリトはにやりと笑みを浮かべて、声を張り上げた。

「それじゃ、いくぜ！」

キリトと彼女、二人ははエムが引き付けてくれていた骨百足へとそれぞれ向かい、攻撃を開始した。

「せやつ！」

キリトが単発のソードスキルで骨百足の気を引けば。

「ふっ！」

同じく、彼女も短剣のソードスキルで細かくダメージを与えていく。

「……負けてらんないな、俺も」

そんな二人の奮戦を見て、エムは心躍らせる。

すると、そんなエムの内から声が響いてきた。

（そこは俺たちも、だろ？）

声は、永夢の生涯の相棒であるパラドのもの。

そしてそのパラドも、やはりエムと同じく心躍らせているようだ。

「そうだな……。じゃあ行こうぜ、パラド！」

（ああ！）

エムが呼びかければ、元気の良い返事が内から帰ってくる。

早速と、エムはストレージから『マイティブラザーズXX』のガシヤットを取り出すと、前線を張るキリトに向かい叫んだ。

「キリト！ 少し時間を稼いでくれ！」

「わかった！」

答えて、エムは瞬時に後ろに下がると、ガシヤットの起動ボタンを押す。

『マイティブラザーズXX』

ベルトのレバーを閉じ、マイティアクションXガシヤットを抜く。

『ガツチョーン ガツシューーン』

そして新たにマイティブラザーズXXを挿入口に差し、レバーを引く。

『ガツチャーン レベルアップ！』

サイド周囲に展開されたセレクトパネルの中から、今度はレベルXのものを選択し、エフエクトがエムの身体を包む。

『マイティブラザーズ！ 二人で一人！ マイティブラザーズ！ 二人でビクトリー！』

「X！」

エムはエグゼイド レベルXにレベルアップする。が、エムは続けてレバーを操作する。

「だ〜い変身!!」

掛け声とともにレバーを展開し、エフエクトがまたエムの身体を包む。

『ダブルアップ!! 俺がお前で! お前が俺で! (ウィーアー!) マイテイ! マイテイ! ブラザーズ! (ヘイ!) XX!!』

エグゼイドの身体は二人に分裂し、二人——エムとパラドは仮面の下で笑みを受かべる。

「よし! 行こうぜ、エム!」

「ああ!!」

「超協力プレイでクリアしてやるぜ!!」

手を叩き合い、二人は一気にスカルリーパーへと向かっていく。

「えっ!? 増えてる!!」

驚いた声を上げるのは、オレンジプレイヤーの彼女。

だが二人は、そんな声を気にも留めずにスカルリーパーに攻撃を仕掛ける。



「ふっ！」

二人息の揃った連携パンチ。

そして、レベルXXの能力で一気に能力が引き上げられる。

「ハアツ!!」

今度は、息の揃った連携キック。

そうして、弛むことのない連携により普段以上のスペックを発揮しながら、二人は徐々に骨百足を追い込んでいく。

「オラツ!!!」

そんな掛け声とともに放たれるのは、息の揃った全力での一撃。

そのあまりの威力に骨百足は、一時身動きが取れないほどのダメージを受ける。

「皆！ フィニッシュは必殺技で決まりだ！」

「心が躍るな！」

「ああ！」

「えっ!?! ひ、必殺技って?」

各人それぞれ反応を見せる中で、エムとパラドはベルトを操作し、キリトはソードスキルを始動させ、彼女の方もキリトの倣うようにソードスキルを始動させた。

「行くぜ！」

キリトが叫び、エムとパラドは同時にレバーを展開する。

『M I G H T Y   D O U B L E   C R I T I C A L   S T R I K E ! 』  
音声とともに、二人は飛び上がる。

そして地上では、キリトと彼女が剣を振るう。

「せやッ!!」

キリトは、片手剣最上位スキルの『ノヴァ・アセンション』を。

「フッ！」

彼女は、短剣の上位スキルの『アクセル・レイド』をそれぞれ打ち込む。

「いっけエ——!!」

そしてトドメは、空中からのエムとパラドによる必殺キック。

たちまち、骨百足のHPは零となり、巨大なポリゴンの塊となって爆散していった。

## 適正テストをBreakthroughせよ

「お疲れ、エム」

「そっちもお疲れ、パラド」

スカルリーパーとの戦闘終了後、エムはパラドと労いの言葉を交わすとレバーを操作し変身を解除した。

そうして一息ついたエムに、オレンジプレイヤーの少女が問いかけた。

「あんたたちいつたい何者？ ……あいつらとは違うみたいだし」

「あいつら……？ ここには君以外にもプレイヤーが居るのかい？」

「ええ……」

それだけ、ぎこちなく答えると少女は、さつと踵を返し立ち去ろうとする。

「それじゃ……助けてくれて、ありがとう」

「あ、待って！」

立ち去ろうとする少女をエムが呼び止める。

「何？ ……まだ何か用？」

「いや……まだ聞きたいことがある。ここはいつたい何処なのか」

「あなた、わたしに話しかけて何とも思わないの？ わたしのカーソルみたでしょ。」

少女の発言に、少し間を開けてエムが答える。

「うん。……オレンジだ」

「あなたはどうも思わないの？ ……なんで、普通に話しかけられるの」

「なら、なんで君が何でオレンジカーソルなのか……聞いたら答えてくれるかい？」

エムの問いに、少女は少し悩むような素振りを見せて、やがて重く言葉を紡いだ。

「……………人を、殺したから」

「……………!？」

少女から明かされた衝撃の事実、二人は思わず言葉を失う。

それを見た少女が、少しだけ寂しそうな表情をして、突き放すように言ってきた。

「これでわかったでしょ？ わたしとは関わらない方がいい」

またも立ち去ろうとする少女に、手を伸ばしたのはキリトだ。

「ちよつと待つてくれ！」

「……………言ったわよね。わたしとは、関わらない方がいいって」

差し伸ばされる手を拒むように振り払う彼女に、キリトは尚も縋る。

「エムの質問に答えてくれないか？ 関わる関わらないにしろ、最低限の情報は欲しい」

そんなキリトの様子に少女も観念したか、ポツポツと話し始める。

「……このことはよくわからない。わたしは一月前に飛ばされてきたんだけど……生き残るのがやっとで、ほとんど探索できてないから」

「一月!? まさか、ここは《クリスタル無効化エリア》……」

キリトの反応に、エムは即座にアイテム欄を探る。

そして転移結晶を取り出して、タツチをする。クリスタル無効化エリアならば、ここで使用不可能のログウインドウが出てくるのだが……。

「……? あれ、普通に使える?」

通常通り、音声認識でない場合の階層や場所の指定を求めるログウインドウが出現し、使用が可能であることが分かった。

「この階層とかはわからなくなってるけど、アイテムやメッセージは普通に使える」ならば、と二人は思った。

彼女の装備等を鑑みても、ここに来たのが一か月前だとするならば、その頃には回廊結晶は無理でも転移結晶は各プレイヤーが二、三個は所持している筈なのである。

「転移結晶を持ってないだけなら、余分に持つてるから、それを分けられるけど……」  
「遠慮するわ」

エムの提案は即座に拒否される。

「……君には何か、事情が——」

そう問おうとしたその時、エムの声を掻き消すように周囲に謎の電子音声が響き渡った。

『《ホロウ・エリア》データアクセス権限が解除されました』

「……なんだ、今の？」

謎の音声に、何かあるのかと周囲に気を配るが、何か起こる気配もなく、突如少女が叫んだ。

「あなた達、それ！」

少女はエムとキリトの手を指差す。

見ると、二人の手に謎の光輝く紋様が浮かび上がって来ていた。

「何だこれ!？」

「これは一体……?？」

「ちよつと見せて」

少女は急いで、キリトの手を取り輝く紋様を観察し始める。

「似てる、あれに……」

「君はこれを知っているのかい?」

似てる、そう漏らした少女にエムは尋ねる。

何か分かれれば、この場所をことをもつと知ることの出来るチャンスだ。

「これと同じ紋様がある場所を知ってる」

「本当か、ならそこに行けば何かわかるかもしれない」

「確かに、行ってみる価値はあると思う」

少女の答えに、キリトとエムは彼女の言う場所に向かうことを決める。

「よかつたら、この紋様と同じのがある場所まで案内してもらえないかな?」

エムが聞けば、少女はまたそれを拒絶しようとする。

「信じるの? 私はオレンジ……レッドなのよ。」

対しエムは、少女に向けて穏やかに微笑む。

「僕には君が好きに人を殺すようには見えない。何かやむを得ない状況になって、それで殺してしまったんじゃないかな?」

「なんで、そんな風に思えるの?」

「……人を殺したっていうんだったら僕らも同じことをしたことがあるから」

——言って、僕は思い返す。あの最悪の日のことを。

「え……?」

「ラフィン・コフィン……知ってるよね?」

「え、ええ。最悪のレッドギルド……」

「そう。彼らの討伐作戦には僕らも参加した。命と命のやり取り、言葉にすれば響きも

ましになるけど……実態はそんなものじゃない」

——ラフコフの連中は、S A Oで生まれた狂気の集合体のような連中だった。

「醜く命を奪い合う、本当に凄惨なものだった」

——理由もなく、ただ快楽を満たすためだけに大勢の命を奪った連中と、目の前の少女は明らかに違う。

「君が僕らを拒絶するのは、奪ってしまった命と向き合うのが怖いから……誰かといると怖くなってしまふから、違うかい？」

——彼女は僕らを拒絶した。怖いから、そう思えるのなら彼女は僕らと同じだ。

「俺もキミが人を殺すようには思えない。さつき俺達と一緒に戦ってくれたし、充分信頼できる」

キリトも、先までのエムの言葉に同意するように少女に向かって微笑んだ。

微笑みを受けた少女は少し困ったように、やがて渋々と二人の提案を了承する。

「わかったわ。その紋様と同じのがある場所まで案内してあげる」

「本当に！　ありがとう」

「別に。わたしも気になるから、一緒に行くだけ」

「……そっか」

素っ気無い返事だが、これで一步前進か……。



エムは内心でそうごちて、出発の呼びかけをしようとしたところで、ふと口籠る。

「それじゃあ、行こうか。……えっと」

「……ファイリアよ」

名を呼びあぐねていると、少女からため息交じりに自己紹介が入る。

「僕はエム。よろしくね、ファイリアさん」

よろしくと声を掛ければ、少女——ファイリアはこくりと頷く。

「俺はキリト。よろしく、ファイリア」

「……よろしく」

続くようにキリトも声を掛ける。すると、今度はぼそりとながらもファイリアも答えた。

「さ、案内するわ。行きましょう」



ファイリアが導く場所まで向かう道中、幾度か出現したモンスターとの戦闘になること

もあつたが、いきなりスカルリーパーが現れてくるといった危機的状況などは起こらず、比較的安全に進んでいた。

その道中で、ふとフィリアがエムに問いかける。

「……そういえば、エムだっけ？ あなた、姿が変わったり増えたりしたけど……あれは一体？」

「え、ああ……」

姿が変わったりとはライダーシステムのことだろう。

簡潔に説明するには……と少し言葉を探り、やがて思考を終えて口を開く。

「さっき僕の姿が変わってたのは、『仮面ライダー』に変身したからだよ」

「仮面ライダー……って、あの？」

「うん。フィリアさんが思ってる通りだと思うよ」

血盟騎士団の『仮面ライダー』と言えば、アスナの閃光の名にこそ劣るがそれなりに通る名だ。

実際、エムにそのことを聞いたフィリアも驚きで目を見開いている。

「じゃあ、あなたが血盟騎士団の副団長なのね」

「そう。……でも、今はギルドごとの攻略っていうよりもみんなで協力し合って攻略を進める方向にシフトしたから、形だけだね」

現在、攻略組を実質的に率いているのはアスナ。

その方針もあって、その他各ギルドのトップがサポートに入る形で攻略組を一括で指揮している。

「へえ……、いがみあってばかりだと思ってた」

「ああ、フィリアは今、SAOがどうなってるのか知らないのか」

フィリアが《ホロウ・エリア》に囚われたのが一か月前。

攻略組が七十六層に到達したのが一週間ほど前では、フィリアは最新の情報はまるで持っていないのであろう。

「……どういうこと？」

「そのことについてはお話しさ。今は、ここのが気になる」

「……そうね」

フィリアは気にしたが、代わりに話題を変える。

「……それで、仮面ライダーってなんなの？」

「あ、それは俺も気になるな。エムに詳しく聞いたことなかったし」

フィリアの疑問にキリトも乗り、少し長くなる説明を強いられるエム。

「うーん、覚えてるかな？ 七年前に《仮面ライダークロニクル》ってゲームを巡って起

こった問題があつて、それを解決するために用意されたのがライダーシステムなんだ」

「仮面ライダー……」

「……クロニクル？」

キリトとフィリアが共に首を傾げる。

「まあ……そうだよ、二人とも十歳はいつてなかっただろうし覚えてなくても当然か」  
これが時の流れか、とエムが憂いているとキリトが説明を急かしてくる。

「それで、その仮面ライダークロニクルっていうのは？」

「《仮面ライダークロニクル》、史上最悪のサバイバルゲーム。前後の事件を含めて、犠牲者は数千人にも及んでる」

「そ、そんなに……」

フィリアが驚きの声を上げる。

まあ当然だろう。千単位の被害となると国内外においても相当のバイオテロ事件となるのだから。

「まあ、多分そろそろ犠牲者の人たちを蘇らせる方法も一般化できるはずだから……」

「どういうこと？」

「詳しくは、あんまり言えないけど……もうすぐなんだ」

「へえ……」

二人の声が重なる。

淡白な二人の反応に、これは二度目は無いなど内心ほっと息吐くエムだった。  
「さ、早く行こうか」

思えば、話し始めてからは足も遅くなっていた。



更に進んだ道中。

今度疑問の声を上げたのはキリトだった。

「しかし、ここははいったい何なんだ？ 階層も表示されないし……」

メニューを開き、キリトは各画面を操作するが、一向にこのワールドの情報は出てこない。

「ここは《ホロウ・エリア》って呼ばれているらしいわ」

「《ホロウ・エリア》……？」

アナウンスにもあつた名前だ。

「二人はどうやってにここに来たか、覚えてる？」

と、フィリアが問うので、二人は少し前の出来事に記憶をさかのぼる。

「ええと……。ダンジョン探索中に急に光に包まれて、気がついたらこのエリアに転送されたんだ」

「ああ、転送される感じはどことなく回廊結晶のコリドーに似ていたな」

蛇足気味の補足をキリトが付け加えるが、結果フィリアはキリトの方は無視して考え込む。

「突然転送された……か。わたしも同じ。ただ違うのは……その手に浮かんでいる紋様」

言つて、フィリアはキリトとエムの手に浮かぶ紋様を凝視する。

「フィリアさんには、この紋様は無いみたいだね」

「ええ。というか、ここでそんな紋様のあるプレイヤーなんて見たことない」

ふと、そんなことを言うフィリア。

プレイヤーと言うからには、このエリアにはフィリア以外にも誰かいるのか……それをキリトは問うた。

「え？ ここには、フィリア以外にもプレイヤーがいるのか？」

「……ええ。でも少しおかしなところもあるというか……」

「おかしなところ？」

エムが首を傾げる。

——おかしなところは、一体……？

「説明が難しいの。実際に会って説明した方がいい」

「わかった。そうしよう」

一先ずとそれで納得したエムだが、同時に別の疑問が湧いて出る。

「ところで、今僕たちはどこに向かっているかな？」

何も言わずとフィリアに同行しているキリトとエムだが、今更ながらに行き先への疑問が湧いたのだ。

「ほら……あそこに見えるでしょ？」

答えたフィリアが手を向けた先、深い森の木の切れ目にフィールドには似ても似つかない、巨大な黒い球体が浮遊して存在するのが視認できた。

「あの球体か。フィリアは中に入った事はあるのか？」

「いいえ、入れないの。でも……二人がいれば入れる気がする。その手の紋様と同じのが描かれていたから」

「なるほど。……きつかけはスカルリーパーを倒した事みたいだったけど、一体何がフラグだったんだ？」

考察するエムだが、噴出する疑問を解消は出来ずに考察はそこで打ち止めとなる

「でも、わたしには紋章が出なかった。二人が取っているスキルに関係があるんじゃないかな」

「こんなことが起こるスキルなんて聞いたことないぞ」

「強いて言うなら、キリト君の二刀流だけ……今は使えないし」

ライダーシステムはスキルではないし……と、やはり考えても無駄となりそうだと、その時だ。

周囲に先ほどと同じように謎の電子音声が響き渡る。

『規定の時間に達しました。これより《ホロウ・エリア》適正テストを開始します。』

「い、いきなり何？」

「な、なんだ今このアナウンスは？」

驚くフィリアとキリトの二人だが、エムは冷静にアナウンスを分析する。

「規定の時間、適正テスト……。フィリアさんは何かわからないかな？」

一か月間、このエリアにいるフィリアなら何かわかるのではないかとエムは尋ねる。

「わたしに聞かれても困る！」

が、フィリアにもテストの詳細はわからない模様。

「適正テスト……とか言っていたよな」

「ええ……確かに、そう聞こえたわ」

「もしかしたら、あのスカルリーパーもそのテストの一環だったのかもね」



「だったら話は早いな。モンスターを倒せば、フラグが建ってくなんて解り易くていい」  
エムの言葉に反応して、キリトは笑みを浮かべる。

元々頭脳派ではないのだから、モンスターを狩る方が自分には適している——そんな考えからだろう。

「そうだね。頭を捻るのもいいけど、僕らにはコッチの方が性に合ってる」

今度はエムが、キリトに同意するように言うと、フィリアが点で呆れたようなポーズを取る。

「……こんな時に、よくそんな前向きになれるわね」

「この状況でテストとやらを回避出来るとは思えないし。それに未知のフィールドってなんかワクワクしないか？」

「それに僕とキリト君がいれば、テストなんて余裕さ」

二人の発言に、フィリアは呆れの色をより強くする。

「……お人よしなのかと思ってたけど、あんた達ってただの戦闘バカだったのね」

ふと、そんな言葉が漏れるがテンションが上がっている二人には届かない。

「ん？ 何か言ったか？」

「別に、なんでも……」

フィリアの答えに、そっかとキリト。

エムの横に並び立ち、互いに戦闘狂のゲーマーらしい笑みを浮かべる。

「じゃあ、さっさとあそこまで行こうぜ！ エム！」

「ああ！」

「超キョウリヨクプレイで、クリアしてやるぜ!!」

「……ばかみたい」

背後からのフィリアの声も、やはり二人には届かない。



適正テスト、といっても割に簡単なもので道なりに進みつつ現れる敵を倒していくと  
いったものだった。

それなりに強いモンスターが現れ、フィリアとしては策を練ってから、と行きたかったのだが——ゲームマースイッチの入ったエムとキリトの戦闘狂コンビによって凄まじい速度で倒されていき、道は終端、残るはボス一体となってしまうた。

「お、あれがラスボスか」

他のモンスターよりも二回りほど大きい体躯に、身の丈以上の巨大な斧を装備した牛の獣人。

ボス特有の《the》という定型詩を纏わせたボスの名は《マッスルブルホーン》。  
「よし、いくぜー！」

事前準備も、作戦もなしにボスに挑もうと剣を構えるエム。

流石にそれは、とフィリアが制止する。

「何だよ、一気にボスを倒してゲームクリアと行こうぜ」

スイッチが入ったからか、何やら口調まで変化している様子のエムに、フィリアはもう何も言うことはないと言った。

「本当、バカみたい……」

そんなフィリアのボヤキをさておき、エムはゲームドライバーと二本のガシャットを取り出した。

『マイティアアクションX ゲキトツロボッツ』

ゲームエリアが展開され、周囲に極彩色のアイテムが散らばる。

「大・大・大変身！」

変身の掛け声とともに、ゲームドライバーのスロットにガシャットを刺して、レバーを展開。

『レベルアップ！ マイティジャンプ！ マイティキック！ マイティマイティアクシオンX！』

レベル2の姿を取ったエムに、ロボットゲーマが噛みつくように合体する。

『アガツチャ！ ぶっ飛ばせ！ 突撃！ ゲキトツパンチ！ ゲキトツロボツツ！』

レベル3へと変身したエム——エグゼイドは、ボスに正面から相対するといつものように宣言した。

「ノーコンティニューでクリアしてやるぜ！」

隣に立つキリトも剣を抜き、スキルの構えを取る。

「行くぞ、エム！」

「おう！」

溜めを解放したキリトが上級剣技《ヴォーパルストライク》で一気にボスの懐まで飛び込む。

続くように、エグゼイドも一気に加速し左拳を振るう。

「これ…私手伝う必要ないかも…」

フィリアは、そんな二人をただ茫然と眺めていた。



「喰らえ！」

『HIT！』

エグゼイドの左腕の強化アームによる一撃がボスのHPが減少させる。

「流石！ 俺も負けてられないな！」

続くようにキリトも《メテオストライク》を始動させる。

打撃と剣戟を合わせた七連撃をボスが捉え、硬直状態となったところに、ボスが斧を振りかぶるが、カバーに入ったエムがキリトに命中するより早く斧を殴り飛ばす。

「一気に決めてやる！」

『ガシヤコンブレイカー！』

エグゼイドはガシヤコンブレイカーを呼び出し、パリイによつてがら空きになったボスの胴へと剣と強化アームによる連撃を叩き込む。

ダメージにより一時行動不能状態となったボス。

畳みかけるべく、並び立つキリトに向けて、エグゼイドは声を張る。

「キリト！ フィニッシュだ！」

「ああー！」

キリトはソードスキルのモーションを開始し、エグゼイドはゲキトツロボッツをキメワザホルダーへと装填し、スイッチを押す。

『GEKITOTSU CRITICAL STRIKE!』

必殺技の発動と同時に、一気に拳を振り抜く。

ロボッツアームが射出され、推進力でボスを空へと打ち上げる。

「まだだー！」

追撃と、手にしたガシャコンブレイカーにマイティアアクションXを挿す。

『MIGHTY CRITICAL FINISH!』

必殺技を起動させ、エグゼイドは跳躍する。

打ち上げたボスへ叩きつけるように剣を振るい、地面へ叩き落とす。落ちたボスは地面で構えているキリトのもとに、そして満を持してキリトは片手剣最上位スキルの《ノヴァ・アセンション》を放ち、見事ボスはポリゴン片へと変わる。

『《ホロウ・エリア》適正テストのクリアを確認しました。承認フェーズを終了します』  
クリアを示す電子音声で鳴り響き、それを聞いたエグゼイドとキリトが拳を振り上げる。

「よっしゃー！ ゲームクリアだー！」

「案外、呆気なかったな」

「いや……あんた達がおかしいだけ」

クリアを喜ぶ二人に、呆気にとられたとばかりのフィリアのツツコミが突き刺さる。



エリアボスを倒し、承認とやらを得られた三人が向かうのは、先ほどフィリアの指し示した謎の巨大な球体。

「……あれよ」

深い森を抜け、少し開け場所に出た三人。

その奥をフィリアが指差し、エムとキリトがその方を見る。そこには、キリトとエムの手に浮かんでいる紋様と同じ紋様が描かれている石碑が浮かんでいた。

「確かに、僕たちの手の紋様と同じだ……」

「これがあの球体に入る装置だと思う。試しに、手を触れてみて？」

フィリアの指示にこくりと頷いた二人は、浮遊する謎の石碑に手を触れさせる。

直後、石碑が光輝き、同様にキリトとエムの紋様も光輝く。

「……やっぱり、関係があつたのね」

「みたいだな」

「多分、これであの球体の中に入れてと思う」

「よし、それじゃあ行こうか」

提案を二人がこくりと首肯し、エムは石碑に手を触れながら言った。

「転移」

通常の転移門同様に、音声認識によりシステムが起動して三人は光に包まれる。

一瞬の浮遊感の後に光が晴れると、三人の前に見たこともないようなエリアが広がっていた。

「これは、いったい……?」

「球体の中は、こんな風になつたのね」

アインクラッド全景を写すホログラムに、ホロウエリアのマップデータを写す電子画面。

その他コンソールに囲まれた不思議な異空間とも称すべき場所が、球体の中の正体だった。

「《管理区》……。ここでホロウエリアを管理してるのか?」



周囲を調べる中で、コンソールを調べるキリトが言った。

「実装……？ エレメント……？ 何なんだ、これ？」

訝しみながら、試しとばかりにきりとがコンソールを操作する。

すると、再度電子音声がりどりに鳴り響いた。

『アクセス権限者を確認しました。転移システムの認証を解除します』

——アクセス権限？ エムがまた考察に入ろうとするが、その前にファイリアが叫ぶ。

「こつちに来て！」

なにやら発見したのか、取り急ぎキリトとエムがファイリアの元へと向かう。

「何かあった!？」

「……これ、転移門かも？ 少し見た目が違うけど……」

ファイリアが指し示すもの、それは確かに形が多少異なれど転移門のそれだった。

「本当だ。これでファイリアさんもここから出られますね」

喜ぶエムだが、対してファイリアの表情は硬い。

「どうしたんだ、ファイリア？」

キリトが聞いても、ファイリアは頭を振るのみ。

「ファイリアさんは一緒に行かないんですか？」

「戻ったところで、わたしはオレンジだから警備NPCに街から追い出されちゃうから

……。だから、あんた達だけで帰りなよ」

「……わかった。それじゃ俺たちは一旦帰るな」

「多分僕たちが戻れば、向こうでもここと繋がるはずだろうし、また来るよ」

「その時は、わたしにメッセージを頂戴。ここにいるようにするから」

「わかった、その時は……またよろしく」

「うん」

最後にそう言い残し、キリトとエムは光の中に消えていった。

「……またな、か」

一人となった管理区。

そこで、フィリアは転移門の前に立つ。

「転移……」

通常なら、光に包まれ指定した場所に飛べるはず。

——しかし、

『システムエラーです。《ホロウ・エリア》からは転移出来ません』

無情にも、システムという壁に阻まれてしまう。

「やっぱり転移出来ない……わたしってなんなんだろう……」  
一人孤独の嘆きが、ホロウ・エリア管理区に弱く木霊した。

## これまでのEvent

転移時独特の浮遊感も過ぎ、目の前の光が晴れるとエムとキリトの目の前に映る景色は第七十六層《アークソフィア》のものだ。

「アークソフィア……戻ってこれたんだな」

「うん、そうみたいだね」

安堵の息を吐く二人だが、突如と爆音が二人の耳に届く。

『聞こえているなら返事をしろオオオ!!宝条永夢ウウ!!』

鼓膜が破れるのではないかというほどの絶叫に、思わず耳を庇う二人だが、耳を塞いでも絶えず声が耳に届くので、エムは声の主の名を叫んだ。

「何ですか!?! 黎斗さん!!」

すると、反応が返ってきたことに驚いたのか、一瞬間を置いた後にまた黎斗の声が響いた。

『ようやく返事をしたかあ! この私を無視するとはいい度胸だなあ!! ブウハハハハ!!』

『あーも! うるせえよ、神!! 見つかったんだから黙れ!』

どうやら共に貴利矢もいたらしく、苦情の声が二人の耳にも届く。

『この私に黙れだとお!? 九条貴利矢ああ!!』

『だいたいずっと叫ばれたら迷惑なんだよ!』

そのまま始まる二人の口喧嘩。

あまり聞いていたいいものではないが、耳を塞いだところで垂れ流されてくるのが現状。

結果、キリトとエムの二人は転移門の前で困り果てるという良く解らない状況に置かれることとなる。

『この私がバグの影響で繋がらなくなった回線を回復して連絡を取ったのに返事をしない永夢が悪い!!』

『だから、声がうるせえって言うてんだよ! もっとポリウム下げろ!』

『この私に指図するなあああ!!』

どんどんヒートアップし、収集がつかなくなり始めるが、ここでようやく救いの手が出た。

『二人共うるさい! やつと連絡繋がったんだから喧嘩は後!』

甲高い声はポッピーか。

状況の分からぬキリトははてな顔だが、エムはポッピーの登場に最早泣きそうであ

る。

『エム！ 大丈夫？』

「あ、うん。ポツピーの方は……大変そうだね」

『うん……。落ち着いたらまた連絡入れるね』

「が、頑張つて……」

そこで、回線は途切れたようで、以降呼びかけても返事はなかった。

「キリト君！ エムさん！」

「アスナ（さん）」

慌てた様子のアスナがキリトとエムの元に駆け寄つてきていた。

「二人共心配したよ……連絡しても反応ないし、死んじやつたかもつて」

「そんな心配しなくても、生命の碑を見れば……」

「キリト君、今は生命の碑は」

「あつ、今は見れないんだつた……」

七十五層の攻略後に起こつたシステムエラーで、七十六層以前の層には行くことができなくなっていた。

エムからの指摘で気付いたキリトは、アスナが今にも泣きそうな顔をしている理由にも気付く。そこへ――

「キリト君（さん）！ エムさん！」

アスナに遅ればせながら、リーファとシリカも駆けつけて来た。

「いったい何処に行つてたの!？」

「良かったです。二人が無事で……」

どうやらみんな心配してくれていたようだ。

リーファは口調こそ怒り気味だが、その顔は安堵に満ちているし、シリカの方は言わずもがなだ。

「二人とも無事で良かったです！」

そんな二人の背後からユイが飛び出し、エムに抱き付いてきた。

経緯もあつてかエムにも良く懐くユイであつたが、キリトの方に行かないのは何故か。

疑問に思い、エムがキリトの方を見れば——アスナに泣き付かれていた。

「……ただいま、ユイちゃん」

それならばしようがない。と、エムはユイの頭を軽く撫でてやる。

そして甘い雰囲気の二人を捨て置いて、エム達はたまり場兼宿であるエギルの店へと向かう。



旧五十層の店から、門構えを変え新たに酒場兼宿兼雜貨屋としてエギルが開いた店に着いたエム達。

「あー！ やつと戻ってきたわね！」

「……言ったでしよ、その辺で暴れまわって戻ってくるって」

そんな彼らを迎えたのは、怒る声と対して冷ややかな声。

ちなみに怒る声の方がリズで、冷ややかな声がシノンのものだ。

「アハハ……」

実際に暴れまわってきたのは事実。

反論する余地なく、エムは苦笑いだ。

「皆も心配し過ぎなのよ」

吐き捨てるようにいうシノン。

長い付き合いではないのに、ここまで読まれているあたり単純だなあ……と、認めざるを得ないエムだった。



「た、ただいま……」

と、後ろからキリトの弱弱しい声が。

それがリズの怒りを叩いたか、怒声が店内に響き渡る。

「キリト！ エム！ あんたらいつたい何処に行っていたのよ！」

その迫力は凄まじく、歴戦の戦士であるはずのエムは元より、数々の修羅場をくぐつたキリトも委縮する程。

一先ず、リズの怒りの矛を収めさせるために

「そ、それは不可抗力で……」

意外と、シノンが眉を吊り上げる。

「そうなの……？」

そんなシノンの問いに答えうように、おずおずとキリトが口を開く。

「……実際、エムの言った通り不可抗力だったんだ。迷宮区を探索していたら急に転移させられて……」

「それって、いきなりって事？」

話を聞いたリーファが疑問の声を上げ、対しエムが疑問に答える。

「うん。それで隠しエリア……っていうのかな？ そんな所に転移して、一応様子見して……戻ってきたんだ」

「……そんなエリアが未発見の状態で見つかるって、あるのかしら？ ユイちゃんは何かわかる？」

根本の疑問をアスナがユイに問いかける。

SAOの全システムを統括するカーディナル由来のプログラムのユイならば、多少なりとゲームのシステムの内情にも詳しくかろうと、皆ユイの答えに注目し、答えを待つ。「アインクラッドに様々な事情で一般のプレイヤーには公開されていないエリアがあります。ゲーム開始時にそれらエリアは封鎖されたのですが、現在は謎のシステムエラーの影響でカーディナルシステムが不安定になっています。それを考慮するとないとは言いつけません」

「成る程ね。ありがとうユイちゃん」

完全ではないものの、考察のはかどる有益な情報をもたらしたユイ。

が、当人はアスナに頭を撫でられながらもシユンと落ち込んだ様子を見せる。

「いえ……現在の稼働情報がもう少し詳しくわかればいいのですが……」

そんなユイに、キリトは優しく微笑みかける。

「今の説明でも充分だよ。ユイ」

「パパのお役に立てたなら、嬉しいです」

微笑みを受けて、ユイはキリトに同じく微笑みを返す。

親子団欒……素晴らしいものだが、とエムは最後に話を畳むべく総括に入る。

「ホロウ・エリアについては、色々調査が必要だね……。とりあえず僕の方は色々とおバツクアツプについて調べてくれる人に調べて貰うよ。何かわかったら、皆にも報告する」

そう言うふとシノンが思い付いたようにエムを見つめる

「どうしたの……シノン？」

「バックアツプって聞いて思い出したんだけど、エムを呼んでいたあの奇声は何？」

シノンの疑問を聞きはつとしたようにエムに視線が集まる

「確かになんかエムって叫んでいたわね」

「それにうるさくて耳が痛くなりそうでした……」

「えっと……ごめんなさい。うちの身内が迷惑を……」

エムはとてつもなく落ち込んだような表情を浮かべ申し訳なさそう謝罪し場が静まり返る。

そしてその状況をどうにかしようとリズがユイちゃんに訊ねる。

「……ねえ、ユイちゃん。そのエリアには見つからない素材とか有ったりするの？」

ふと、リズがユイに尋ねた。

「その可能性は十分にあると思います」

ユイの回答は、実に曖昧でかつ期待の持てるものだった。

鍛冶師として血が騒ぐのか、リズは期待を胸に心躍らせる。

「そっか、未知の素材……未知のスキルとかもあるのかしら……」

そんなリズの言葉に煽られたか、皆からも並々ならぬ熱意の声上がる。

「だったら、ピナのパワーアップも……」

「私も、短剣はどうも合わないから……いい武器を手に入れたい」

「あたしも、もっと……」

そんな皆の様子に慌てるアスナ。

「ちよつと、皆……もしかして行くつもりなの!？」

だが、そんなアスナの様子を余所にキリトは無邪気に笑む。

「いいじゃないか別に、俺たちだってちゃんと帰ってこれたんだから」

そんなキリトに突っ込むのは、苦い顔のエム。

「……そういう問題じゃないと思うんだけどな、キリト君」

「いや、でも……皆のレベルなら、ホロウ・エリアでも十分に戦えるだろうし、そこで手に入るアイテムで皆を強化出来たら、この先の攻略だってグンと楽になるだろう?」

「そ、それは確かにそうね……」

流されそうになるアスナ。

実際に、キリトの言う通りホロウ・エリアには手強いモンスターが多い分、強いアイテムがあると思される。

「なら、わたしも行くわ。キリト君だけを行かせるわけにはいかないもの」

結局、妥協案で落ち着くアスナだった。

「……ありがとう。アスナが来てくれるなら、フィリアも喜ぶよ」

キリトがフィリアの名を出した瞬間、辺りの雰囲気が一気に凍り付く。

「フィリア……?」

リズはキリトが呼んだ名を反芻し、

「それって……」

「もしかして……」

アスナとシリカは共にキリトを睨み、

「……キリト君?」

リーファは呆然とキリトの名を呼び、

「パパ……その人って」

ユイは冷めた目でキリトを見る。

「もしかしなくても……女の人、よね?」

そして最後にシノンが、そうキリトに問いかける。

「ああ、よくわかったな。名前しか言っていないのに」

キリトは、周りの雰囲気にも気付かずに呑気と意外気な顔をする。

「ほらねえー!!」

新たなライバルの出現に、アスナはもう絶叫するしかない。

「暴れまわってただけじゃなくて、女の子も口説いてんだ」

わざとらしくため息まで吐いて、呆れたように言うシノン。

「く、口説くとか、そういうんじゃないよ！なあ、エム？」

一身に関わることに、キリトは全力で否定してエムに助けを求めるが……

「……ノーコメントで」

否定はしきれない、エムは黙秘権を行使した。

「おい!?!」

「どうせ、『力になってやりたいんだ』……とか言ってきたんでしょ」

「ああ……」

シノンの慧眼に、エムは脱帽でもうため息しか漏れない。

「おい、エム!?!」

「キリト君……わたしが泣くほど心配して必死に探していた時に女の子と……」

涙目になるアスナ。

「待て待て！ 不可抗力なんだよ!!」

必死に言い訳を試みるキリトだが、と周囲の冷ややかな目は絶えない。

「また不可抗力、ね」

責めるはシノン。キリトに冷々たる目が突き刺さる。

「向こうに飛ばされたらたまたまファイリアがいて、そこにスカル・リーパーとかが降ってきたから一緒に戦っただけだよ!」

「……うう、キリト君のバカ!」

必死の言い訳、だがアスナには届かない。

「知らない」

と、シノン。

「右に同じく」

かける言葉も見つからず、エムは目を瞑る。

「おい!? エムと一緒に居たんだからちゃんと擁護してくれよ!」

「あはは! 自業自得ね」

叫ぶキリトを笑うのはリズ。対してキリトは、頭を抱える。

「人を助けたんだから得はあっても、業なんかないだろ……」

嘆くキリトを余所に、リズは一笑いしてスツキリしたのか清清しい笑みで皆に提案する。

「でもまあ、何かあっても《黒の剣士》様がいることだし、探索には行きましようよ」「同感ね。この世界にいつまでもいるわけにはいかないもの」

コーヒートを一口、クールにシノンにはリズの言葉に同意した。

「あ、あたしも行きたいですー!」

興奮気味に、シリカが手を上げる。

それを抑えながら、エムが皆に向けて言う。

「まあ行くにせよ、もう少しこっちが落ち着いてからにしよう。まずは七十六層突破だ」

「突破はいいけど……二人は、もう今日攻略に出かけるのはダメよ」

「おお! と全員手を振り上げる寸前、アスナがキリトとエムに対して釘を刺す。

「えっ、なんで……?」

これには戦闘狂の二人、思わず声が揃う。

「さつき《スカル・リーパー》と戦ったって言ってたでしょ? 当然ね」

馬鹿を見るような目で、シノン。

「いやでも、HPは全快してるし……」

「パパ! 今日はママの側にいてあげてください」



尚も行こうとするキリトに、むすつと怒るユイ。

「……そうだな。じゃあ、明日からにしよう」

基本的に女性陣に勝てないキリトだが、やはりと最愛の娘であるユイにも勝てないようだ。

「せんせーも、ですよ！」

「……医者の不養生は良くないからね、そうするよ」

エムもエムで、やはりユイには勝てない。

「じゃあ、キリト君はちゃんと部屋で休む！ ……ほら」

「ちよ、アスナ……引つ張らなくても、ちゃんと部屋行くから……」

「だーめ、信用なりません」

「ええ……」

キリトはアスナに引つ張られて二階の奥に消えていく。



女性陣の質問攻めでヘトヘトなエムは、休めと言われたはずなのに逆に疲れて、椅子に座ろうと……その時だ。

『ブウハハハハ!!宝条永夢ううう!!!』

再び黎斗による奇声が耳に届き、座り損ねて床に転がる。

「いてて……何ですか!?! 黎斗さん」

疲れもあつて、イラつきながら返事をするエム。

『今回は返事をするの早かったなア……褒めてやろう!』

上から目線の黎斗の声の背後で、ポツピーのため息が聞こえる。

「はあ……さつきまで謎のエリアに飛ばされて、連絡手段が無かったですよ」

ため息が移ったか、エムは苛立ちを吐き出して冷静に返す。

『何だと……? 永夢、今SAO内部で何が起きているのか詳しく説明しろ』

どうやら、黎斗の興味は《ホロウ・エリア》に飛んだようだ。

「わかりました。黎斗さん」

エムは少々ため息を混じらせながら返事をする。

そして、思い返すのはつい先日。七十五層を踏破し、七十六層に足を踏み入れた。



見えた景色は穏やかなもの。直前までの世界の運命をかけた戦いの場とは打って変わったの、穏やかなフィールドだった。

しかし、フィールドの穏やかな様子と打って変わって、攻略組の皆の雰囲気はあまりいい物ではなかった。

特に血盟騎士団の人たちは。でも、それは当然のことだった。

自らが信じ、支えてきた団長のヒースクリフが実は茅場で、なんて話をすぐに飲み下せるような人間はこの中には一人もいないだろう。

——そんな時だ。

「おい、どういうこった!？」

突如と、エギルさんが驚愕の声を上げた。

振り向けば、ウインドウを開きながら固まっているのが見え、僕は慌てて声を掛ける。

「どうしたんですか!？」

「アイテムや、一部スキルが消えてやがる!」

「えっ……!？」

慌てて確認する。

確かに、一部アイテムやスキルが文字化けを起こして使用不可になっていたようだった。

「なんで……」

呆然と呟いていると、今度はクラインさんが驚愕の声を上げる。

「おい！ 迷宮区までの道が消えてるぞ!？」

「ハア!？」

キリト君が驚愕に叫ぶ。

急ぎ確認するが、今さつき七十六層に上がるために使った迷宮区タワーの階段がなくなっていた。

「嘘だろ……おい……」

呆然とエギルさんが呟く横で、どうにか思考を巡らせて僕は叫んだ。

「転移結晶は！」

「使えない……!!」

ちようど試していたらしいキリト君が憤りの叫びを上げる。

落胆と絶望が攻略組を覆うが、それでもアスナさんは声を張る。

「皆、諦めないで！ わたしたちが今ここで折れてしまったら、今までに命を懸けてきた

人たちの犠牲が無駄になる……そんなこと、させちゃいけないわ！」  
声に、キリト君が続く。

「先に進まなきや俺たちに未来はない……俺は行く！ 皆はどうする？」  
責任ある大人として、僕も二人の奮起の声に応えねばなるまい。

「皆さん！ 嘆くのも、足が竦むのも……わかります」

皆の顔を見る。一様に怯えたような、そんな表情だ。

先ほど力強い言葉を残した二人でさえ、決意に満ちた表情を微妙に不安に歪めてい  
る。

「でも、僕たちの大半は責任ある大人です。今ここにいる二人、キリト君とアスナさんを  
支えていくためにも皆さんの力を貸してください」

声に熱が乗り、続いて頭を下げる。

「お、俺たちは……」

「あと四分の一、それをこんな状況で……」

耳に届く声は、戸惑いや不安の色を隠せないものが多い。

それでも、勇気を振り絞って声を上げてくれる人がいる。

「ハッ、こんなことでへばる俺様じゃねえ！ 俺は行くぜ、キリト！」

声を張るクラインさんは、ニヤリと笑う。

「クライン……」

「俺も、折角の商売のチャンスは逃せないな」

続くように声を上げたエギルさんも、また同じくニヤリと笑う。

「エギルさん……」

二人の声に、他の攻略組もメンバーも続いてこれからの参戦の意思を述べる。

「……皆、ありがとう」

僕はただ、声に応えるようにもう一度頭を下げた。(お願いされました)

改めて、七十六層の主街区を目指す攻略組のメンバーたち。

——と、その時だ。突如と僕の身体に異変が起きた。

「……!?!? これは?」

意識がぶれるような、半身が削れるような、そんな感覚。

「おい、エムどうした?」

「大丈夫ですか? エムさん」

キリト君とアスナさんに声を掛けられた直後、ぞわりと沸き立つ感覚とともに『何か』が僕の身体を離れた。

「……なんで、俺が？ エム！」

生身から発声された相棒の声。

急ぎ声の方を見れば、そこにいたのはパラドだった。

「パラド……！」

なんで……今まで分離できなかったのに。

またゲームのバグの影響か、思考を巡らせてみるも大したことは浮かんでこない。

なら、今はこのことを素直に喜ぼう。

「これからは、向こうでみたいにまた一緒だな」

「エムと一緒なら、心が躍るな！」

「ああ！」

生身では二年ぶりとなる、手の打ち合わせ。

パラドの言う様に心躍らせていると、呆然と問いかけてくるアスナさんの声が聞こえてきた。

「あの……エムさん？」

「はい？」

状況の把握が出来ていないといった様子のアスナさん。

「その人は……いったい？」

「ああ、こうして会うのは初めてだからね。紹介するよ、僕の相棒のパラドだよ」

「よろしくな、アスナ」

常の表情である口角を上げた笑みをパラドが向ければ、アスナさんは一瞬思案顔になった後にまた聞いてくる。

「えつと……パラドって、あの?」

あの、とはブラザーズに変身した際にパラドが分裂したR側を担当していた件についてか。

「な、何でエムから出てきたんだ?」

「えつと、それは……」

真面目に答えると長いので、要所をかいつまんで説明する。

と言えども、パラドの件に触れるとライダークロニクル事件の子細を語ることになるので、多少なりと長い説明になった。

アスナさんは一先ずと納得してくれたが、キリト君の方は終始首を傾げたきりだ。

そうして、パラドも交えて七十六層の主街区《アークソフィア》にたどり着いた攻略組一同。

一応、転移門を解放して下層への転移を試したものの見事に失敗し、流れでそのまま



解散となる。

皆、シヨックから足取りは重いが、それでも有志のメンバーが街の周囲のマッピングを買って出てくれたし、クラインさんとエギルさんに至っては新しい店を探してくると駆け出していった。

僕はというと、キリト君とアスナさんらとともにバグの影響がないか手持ちのアイテムやスキル等のチェックをしていた。

「——見て！ キリト君！」

と、アスナさんがキリト君を呼んだ。

気になったので僕もアスナさんの方によると、ウィンドウを可視化して僕たちに見せてきた。

「このアイテムよ」

示してくるのは、文字化けして使えなくなったであろうアイテム群の中で唯一光るもの。

しかし、文字化けしている故に何のアイテムかは見当がつかない。

「文字化けして読めないな？ 一応オブジェクト化してみるか……」

言って、キリト君は早速とアイテムストレージを開いてそのアイテムを選択した。

光とともに出現したのは、涙を模した大きなクリスタル。見覚えのあるそれを見て、

アスナさんが声を漏らす。

「これって……」

「あ、ああ……ユイのクリスタルだ」

言葉に詰まるキリト君。

理由はわかる。もし何かの拍子でユイちゃんのデータが消えるような憂き目にあられては困るどころの騒ぎではないからだ。

「……やってみるか」

だが、やがて決意したかのように呟くと、掌に載るクリスタルを二度タップした。すぐに光が溢れ出し、クリスタルがキリト君の手を離れる。

「……………」

三人の間に緊張が走る。

浮かび上がったクリスタルはさらに光を増し、爆発的な閃光に思わず一瞬目を逸らす。

「……また、会えましたね」

鈴音のような声が耳に届いた。

驚きに、すぐに逸らした視線を戻せば――

「「ユイ（ちゃん）！」「」

空に浮かぶ白いワンピース姿の女の子——ユイちゃんが、涙を浮かべながらキリト君とアスナさんの胸に飛び込んだ。

幾数名か同じくと残っていた周囲からなんだなんだと視線が飛んでくるが、お構いなしに親子三人は抱き合う。

「……おかえり、ユイちゃん」

ふと、万感の思いに溢れ、漏れた言葉。

それが耳に届いたのか、ユイちゃんはキリト君とアスナさんに一度軽く頭を下げると、今度は僕に抱き付いてきた。

「ただいまです。せんせー!」

何だか泣きそうになる。

それを誤魔化すように、僕はユイちゃんの頭を軽く撫でた。

その後は——

「リズ、もう君は七十五層以下には戻れないんだ」

「——え?」

僕たちを心配してくれたのだろう。

流しておいたバグの影響による不具合で七十六層に上がったが最後、七十五層以下には戻れないという情報に眼もくれずに、リズが駆けつけてくれた。

「上級鍛冶スキルも消失して、三百万コルをはたいて買った店も……人生、終わった？」  
壊れた人形のように、何度も「店が……」と繰り返すリズの姿は、見ていてとても痛ましかった。

さらに――

「最前線で事件があつたつて聞いて、エムさんたちが心配で……いてもたつてもいられなくて」

同じく、シリカちゃんも僕たちを心配して駆け付けてくれた。

幼いながらも儂げな表情のシリカちゃん。そんな彼女に伝えるには忍びないが、残酷な事実を伝えなければならぬ。

「シリカちゃん、聞いて欲しいことがあるんだ」

「はい？」

「七十六層は一度上がってきてしまうと、もう下の層には行けなくなるんだ……」

「え……ええっ!?!」

驚き、目を剥くシリカちゃん。

「そんな……あたし、中層プレイヤーだからこの階層のモンスターには全然歯が……」  
「……とりあえず、僕たちのところで何とかできるように手配するよ」

「重ね重ね、本当にごめんなさい！」

「いいよ、心配してきてくれたんだし」

「こうして、リズとシリカちゃんは一先ずとエギルさんの店預かりとなった。

——そして、異変はこの後も続く。

「……お兄ちゃん？」

「——へ？」

妖精が現れたというクエスト依頼を受けた、僕とキリト君にアスナさん。

そうして、やってきた森の奥にいた妖精がいきなりキリト君に対して「お兄ちゃん」発言、驚かないわけがない。

「ほ、本当に……スグなのか……？」

「当たり前じゃない！」

「つて言われてもなあ……」

「なによ、信じられないわけ？」

「いや、スグはこんなに胸大きくないだろ」

何を言い出すか、キリト君がスグと呼びかけた妖精の胸を指し、言う。

当然、引っぱたかれるまでがオチだが、それでもキリト君は疑念を解かない。

「いてて……でも、SAOに途中参加なんてありえるのか？」

「まあ……確かに」

言わんとし難いことは解る。

もしだったら、脳をスキャンされてNPCに仮想の人格データを埋め込んだと言われた方がまだ説明がつく。

「じゃ、じゃあこういうのはどうかかな？」

と、アスナさんが無邪気そうに手を上げた。

「はい？」

「彼女がキリト君の妹さんなら、家族しか知らないような秘密を聞けばいいんじゃないかな？」

悪戯っぽい笑みを浮かべるアスナさん。

単に訊きたいだけだろうが、面白そうなのでそのまま僕も了承する。

「あ、名案ですね、それ」

「じゃあ、なにかキリト君のとおきのおきの秘密ってない？」

アスナさんが聞けば、彼女も先ほどの仕返しか悪戯っぽい笑みを浮かべる。

「それじゃあ……うーんとね。あ、そうだ、お兄ちゃんが小学四年の授業参観の日に……」

と、そこでキリト君が慌てて彼女の口を塞ごうとする。

「待て待て、わかった！ れっきとしたウチの妹だ！ だから俺の黒歴史を掘り返さないでくれえ!!」

が、それでも彼女は話を続ける。

「お母さんが見に来るからってはいじやったらしくて、教室で……」

「やめてくれえ!!」

こうして、キリト君の妹であるリーファさんもSAOにやって来てしまったのである。

——そして、さらに。

「お兄ちゃん、あれ」

早速リーファさんをアークソフィアに連れ帰り、転移門広場までたどり着いたその時だ。

「あそこ、空がなんか光ってるんだけど……」

リーファさんが指差す先、確かに空が光っていた。

「……本当だ、何だあれ？」

「テレポートの光とは、ちよつと違うね」

「うん、色が少し違うよね。それに、あんな空高く転移するなんてないし」

「だよな……でも、街中でなんかイベントが起こるわけでもなし」

四人でやんややんやと言いつつ合っていると、空を見ていたリーファさんが叫んだ。

「お兄ちゃん、見て!!」

慌てた様子に急ぎ、仰ぎ見れば変色していた空からプレイヤーが転移してきていた。

「マズい!!」

示し合わせるまでもなく、叫んだキリト君とともに限界の速度で駆ける。

その間も、プレイヤーはどんどんと地面に近づいていく。

一応、安全圏内なのでダメージはないが衝撃は伝わる上に、プレイヤーには意識がなさそうだ。

「間に合えー!」

キリト君が叫ぶ。

と、脳内から声が響いてきた。

(俺が行く)



「パラド!？」

反応する間もなく、体内から粒子が飛び出して、一気にプレイヤーの真下で身体を形成する。

「よつと」

そうしてパラドが受け止めた女の子だが、やはり意識はないようで一先ずと宿まで運ぶことになったのだが――

「んっ……」

「お」

女の子が目を覚ました。

辺りを軽く見まわして、状況把握に努めた後、パラドに背負われているという自身の状況に気がついて、飛び下りた。

「……………」

睨んでくる彼女だが、一応と話は聞かねばならぬと声を掛ける。

「えつと……君は空から落ちてきたわけなんだけど、何があったか教えてくれない？」

「……私、ここに来た前後のことが全く記憶にないの」

「そっか」

何かあった、では済まなそうだ。記憶を飛ばすほどの出来事とは……。

更に話を聞いていくために、また質問を投げかけた。

「じゃあ、君が前までどこにいたかもわからない？」

「……その前に、一つ良いかしら？」

と、彼女が半歩退いて言ってきた。

「うん？」

思わず疑問で返すと、彼女は警戒しながら恐る恐ると尋ねてきた。

「……なんで、あなたたち皆剣なんて持つてるの？」

「えっと、それはここがソードアート・オンラインのゲームの中だからとしか答えられないんだけど……」

「……ごめんさい、わからないわ」

記憶がないと言っていたが、まさかSAO事件以後の記憶も抜けているのか。

どうしたものかと思案していると、キリト君が耳打ちで話しかけてきた。

「つまり、彼女には記憶がないってことでいいんだな」

「うん、そうなるね」

答えれば、キリト君はユイちゃんに尋ねる。

「ユイ、彼女のことでは何かわからないか？」

「はい、調べてみますね」

目を閉じて、検索を掛けているのだろう唸るユイちゃん。

だが、それも数秒ほどで終わると少し険しい表情で語り始めた。

「終わりました……結果から言うと、この方のIDはつい先ほどログインされたもの  
ようです」

「ついさつき？ ユイちゃん、どういうことかわかる？」

アスナさんが尋ねれば、また少しの思案の後にユイちゃんから答えが返る。

「はい、リーファさんと同じように他のゲームからログインした可能性が高いと思いま  
す」

と、ここまでの状況話に混ざれなかった彼女が不安げに語り掛けてくる。

「えっと……説明してもらえると助かるんだけど」

「ああ、細かい説明は宿に戻ってからするよ……えっと、なんて呼べばいいかな、キャラ  
ネームとか？」

尋ねれば、彼女は首を傾げる。

「キャラネーム？」

「あ、こうするとウインドウが出るからそこに出る名前を読んでくれればいいよ」

右手を振り、実演してみせる。

それを真似るように覚束ない様子で右手を振った彼女は、ステータス画面を見るのも

慣れない様子で時間を変えて名を読んだ。

「こ、こうね……シノン、って書いてあるわ」

「シノンさんか、よろしくね」

こうして、シノンさんもデスゲーム《ソードアート・オンライン》の地に足を踏み入れた。



「これが主だった現在のSAO内部で起きた出来事です」

長い説明を終えて、一息つくエム。

逆に話を聞き終わった黎斗は、ふむふむと話を理解し噛み砕いた。

『成程……SAOに迷い混んだ二人のことも気になるが、君の言う《ホロウ・エリア》とやらは興味深いな……』

やはり黎斗はゲームのことにしか頭がないようで、エムはため息をつく。

と、そんな黎斗の背後から声が届く。

『その迷い混んだ二人の方は、自分が保護するように掛け合つとくわ』

声の正体は貴利矢で、エムの不安もこれでどうにか解消されそうである。

「ありがとうございます。貴利矢さん」

『なくに、良いつてことよ』

エムの礼に軽く答えた貴利矢は、早速と動き出してくれたようで階段を下る音が耳に届いた。

と、そのタイミングで黎斗がさつと告げた。

『エム、君は《ホロウ・エリア》について調べてくれ』

「え？　でも攻略が…」

『パラドと分離が可能になった今ならば、攻略はパラドに任せ君は《ホロウ・エリア》の調査を出来るだろう』

攻略の方が最優先だ、そう反論しようとするエムだが、次々と黎斗は指示を出して行く。

『君のストレージに新たにゲームマードライバーを1つ送った。パラドに渡したまえ』

「ちよつと黎斗さん！」

呼びかけるも反応はなく、どうやら既に黎斗は回線を切ったようだ。

ため息を吐きながら、身を投げ出すように椅子に深く腰掛けたエムは呆然と呟く。

「休む暇、なさそうだなあ……」

先ほど休むように言われたはずなのに、全く心休まらぬエムであった。

## Purpleの少女

「——というわけで、当面は僕は攻略に参加できそうにないんだ」

「た、大変だな……エムも」

昨夜のこと、エムはバックアップに付いている黎斗に《ホロウ・エリア》の調査に専念するように言われたのだ。

その皆を一先ずとキリトに伝えようと、苦笑気味に了承してくれた。

「一応、パラドが残れるから戦力としては落ちないと思うけど……」

「攻略なら、俺に任せとけ」

と、パラドが胸を張るので、一先ずと攻略は安心して任せられそうだとエムは思った。

「任せたよ、パラド」

「ああ」

笑むパラドに、エムも微笑みを返す。

「僕も《ホロウ・エリア》の調査を終わらせてすぐ戻るよ」

「楽しみにしてるぜ」

では行こうと、立ち上がろうとしたその時だ。

バンと勢いよく扉が開かれて、酒場にクラインがやってきた。

「おい！ 《ホロウ・エリア》なんて存在しねエぞ！」

「ど、どうした……クライン？」

「だから、昨日キリトが言ってた《ホロウ・エリア》つつたか？ 行けねエんだよ」

「そんな筈は……確かにアクティベートしたぞ」

それに関してはエムも確認していることだ。

どういふことかとキリトとともに首を傾げるが、クラインはそのまま続ける。

「そう聞いたからよオ、俺も行こうとしたんだけど……行けねエのよ」

クラインのは発言に更に首を傾げる一同。

その中、一先ずとキリトは皆に提案した。

「取り合えず、転移門に行ってみようぜ」

そうして、一同七十六層主街区《アークソフィア》の転移門人場までやってきた一同。クラインは転移できなかつたとの事なので、エムが転移門の前に立ち、叫んだ。

「転移、《ホロウ・エリア》管理区！」

少しして、光がエムの身体を包む。

そして独特の浮遊感が過ぎ去ると、目の前には確かに管理区の様子が広がっていた。

「アクティベート出来てる……よね？」



と、一応外に出るなど等確認を済ませて、アークソフィアに戻るエム。  
「転移、一応出来ました」

報告をすると、納得がいけない様子のクラインがエムに迫る。

「なんでエムは転移出来るのに俺は出来ねえんだ!？」

その様子を見て、苦笑気味にキリトが呟く。

「これはちよつと調べてみる必要が有りそうだな……」



翌日、主要な面々に集まってもらい調査の結果を伝える。

「んじや、結果から説明するとだな……《ホロウ・エリア》に行く事が出来るのは、俺とエムの二人だけだ」

ポリポリと頭を掻きながら、キリトが言う。

「そして、一緒に付いていけるのはキリト君と僕に対してそれぞれ一人ずつ。パラドが僕と一体化している状態の場合は僕一人だけが行けます」

続けて、エムがキリトの言葉に付け加える。

「つまるところ、ホロウ・エリアに行くにはエムかキリトと一緒にやないと行けなくて、

それも着いてこれるのは二人までってわけか……」

難色を示したのはエギルだった。

ホロウ・エリアに向かえる最大人数は四人。それでは攻略の幅が狭まるし、何より完全未知のエリアとなるので各層の迷宮区よりも遥かに攻略の危険度が高くなってしまうのだ。

「ええ、今後ホロウ・エリアに行く場合は誰と行くかが重要になると思います」

そのため、エムの言う様に人選が重要なファクターとなる。

更にアイテムの採取等も行う場合は持つていくアイテムの量にも相談しなければならぬ。ストレージの量は無限ではないのだ。

「でもよオ、何でキリトとエムの二人は自由に行けるんだ？」

と、クラインが諸問題はさて置きとキリトとエムに疑問を投げかける。

「俺とエムに共通する点は《ホロウ・エリア》で表れた紋様だな……」

意識し、力を籠めれば手に浮かぶ不可思議な紋様。それを見つめながら、キリトは難苦の声を漏らす。

「ホロウ・エリアに関しては、謎が多すぎるな……」

結局、それ以上に話は進まず、皆での会議はお開きとなる。

そのままエギルの店の酒場にて、キリトとエムの二人は言い渡された休暇を存分に持

て余していた。

「お前らな……やることないからつてずつとウチの店の席占領すんな。これでも繁盛してんだ、ほら気分転換にでも街でも回ったらどうだ？」

呆れたように二人を追い出そうとするエギルに、そんなはずないだろ……と言い返そうとしたキリトだったが、実際に店内を見回すと昼時ということもあつてかそれなりに賑わう店内が。

「……行くか」

「そうだね……」

そんな店内の様子に頑なに居座るほど無粋でもなく、二人は街へ繰り出されることとなった。



「なんだかんだ、皆それなりに順応してるんだなあ……」

スキル等打ち消されるゲームシステムの根幹にかかわるバグに見舞われても尚、ア―

クソファイアの商店通りにはプレイヤーによる出店や鍛冶屋などが出店されている。いや、このタイミングだからこそ早急にスキルの再取得や研鑽に回し、顧客を獲得しようとする狙いも多分にあるのだろう。

「高層にいる生産職の人たちは、強かじやないと食べていけないからね」

「どっちにしろ生き残るために強さか……必要なだろうけど、なんだかなあ」

「……早く、百層までたどり着けると良いね」

「だな」

そうして活気なく街並を見て回っていく二人。

——とその時だ。何やら視線を感じ、歩みを止める。

「キリト君」

エムが呼びかけるが、言わずもがなとキリトが反応を見せる。

「誰か俺達を見ているな……」

「……索敵スキルには反応はないみたいだけど」

「俺の方でも反応がないな」

足音等の環境音によって気配を掴んでこそのいるが、索敵スキルをマスターしているキリトとエムからも気取られないとなると、それは隠密スキルを同じくマスターしていることになる。

それほどの実力者が狙うとすれば『暗殺』。以前にもシリカでの一件で、それを経験したことのある二人は尚も警戒を強めた。

「裏路地まで引き付けよう」

「ああ」

ぼそりと告げられたエムの提案に乗り、徐々に徐々に人通りの少ない裏路地にまで歩を進め、あちらから仕掛けてくる隙を窺う。

「……………」

「……………来ないね」

NPCすらも寄り付かないような細路地。仕掛け来るには正にうってつけの場だが、気配が動く様子もない。

「こつちから仕掛けるか……………」

「そうだね」

意を決し、キリトは気配に向かって声を張る。

「……………おい！　そこにいるのはわかっているんだ！　何が目的か知らないが、要望があるなら話は聞く。出てきてくれないか？」

すると気配が動きだし、甘やかな——少女の声が二人の耳に届く。

「あーあ、気付かれちゃってたか……………」

少悪戯に失敗した子供のような笑みを見せながら、二人の前に姿を見せる。

薄紫色の髪の毛に赤い瞳、そして抜群のスタイルを際立たせるように所々を露出させた装備に身を包む少女は——ゆらりとキリトとエムに微笑みかける。

「こんにちは」

笑む少女に、キリトは警戒を解かぬまま声を掛ける。

「……今までに会ったことはないよな」

しかし少女は、キリトの警戒を余所に満面の笑みのまま手を振る。

「うん、初めましてだよ。アタシは《ストレア》、よろしくね」

ストレア……聞き慣れない名に、キリトは眉間に皺を寄せる。

「どうしたの？ 怖い顔して」

首を傾げるストレアに、エムは警戒は解かないままで疑問を投げかける。

「ストレア……さん、僕たちをつけていた理由を教えてくださいませんか？」

「んー……ちよつと興味があつたから観察させてもらつてたの。二人とも強くて有名なだもん、興味を持って当然！」

それでストーカーカー紛いのことをするのか——エムは呆れそのまま口にする。

「……君も、相当に強いみたいだね」

「あ、わかる？ アタシも結構強いよ」

しれつと言い張るストレア。

事実、キリトとエムの二人に対し姿を補足させなかったので、その事を笑えない。

「それにしても……うん、やっぱりね〜」

どう対応したものかと頭を悩ませていると、ストレアが二人の顔を覗き込んでくる。

「やっぱりって、何だ？」

キリトが聞けば、ストレアはにやにやと笑んで言う。

「二人とも、近くで見ると結構カワイイ顔してるね〜」

「へ？ か、カワイイ……？」

唐突のストレアの物言いにキリトは呆然とする。

「三十にもなつて言われるとは思わなかったよ……」

そしてエムだが、流石にカワイイはダメージか項垂れている。

「んふふ、えいっ！」

と、今度はストレアがキリトを首から抱えるように胸に抱く。

「うわっ!!? ちよつと! く……くるしいっ!!」

突然のことにキリトはストレアを引きはがそうとするのだが、STR値もそれなりにあるのか中々振りほどけない。

「いいじゃん! だつてカワイイんだもん! こうしたくなつちやうよ」

「どんな理屈だ！ わつ、ぐりぐりするな!？」

どういう状況なのだろうか、警戒していた少女は天真爛漫にキリトを胸に抱いている。

とりあえず、このことは後でアスナに報告しよう——エムはそう決意した。

「あつ、ねえねえ！ これから時間ある？ 一緒にお茶でも飲みたいな——！」

キリトを胸に抱きながらお茶の誘いをするストレア。

「え？」

困惑の声を上げるキリトを余所に、ストレアは有無を言わせない。

「いいよね？ さっきも要望を聞くっていつてたし」

「わかった！ 付き合うから!？ まずは離してくれ!!」

キリトが必死に引き剥がすと、ストレアはまるで幼子のように両手を上げて喜びの感情を表す。

「やったね！」

——なんなんだ、この人……。

キリトとエム、二人の思考は重なった。



## P A R A — D X のボス戦

七十六層にたどり着き十数日——

様々なアクシデントに見舞われつつも、プレイヤーの攻略への思いは尽きることなく遂にフロアボスとの戦いが始まるうとしていた。

「皆さん！ 今日……遂にフロアボスとの決戦です。絶対に生きて、勝ちましょう！」  
攻略指揮であるアスナの声に、攻略組全員が叫びで応じる。

「遂にフロアボスとのバトルか……心が躍る」

パラドもその一人、生来の本能には抗えずに控える戦いに高揚を隠せていない。

ただ唯一の懸念は、現在並行して行われている《ホロウ・エリア》の調査にエムが赴いているために共に戦うことができない点か。

「では、皆さんそれぞれパーティーを組んでください」

喧騒が落ち着いていた頃合いを見計らって、アスナが手を叩く。

最序盤を除いて、今までのボス攻略での最小の戦闘単位は《ギルド》であったが、見舞われたバグの影響とラスボスがトップギルドの団長であったこともあり、正直といったところギルドという単位に拘って限りあるリソースを奪い合うという状態が馬鹿ら

しくなったというのが攻略組の総意で、全体のバランスを見てパーティーを組む方がいいだろうという案が採用されたのはそんな事情があつてのことだったりする。

「ねえねえ、よかつたら私と組まない？」

誰と組むか……そんな風にパラドが悩んでいると、背後から甘やかな声がかかる。

振り返るとそこにいたのは、先日キリトとエムに絡んできた少女——ストレアだった。

「お前は、ストレアだったな」

「そうだよ、よく知ってるね。アタシのこと」

「お前のことは見てたからな、エムの中で……」

「ふうん、エムの中……。そつかり、キミがパラドなんだね」

その名を呼ばれたことに、パラドは驚く。

目の前の少女への疑念は尽きない。さらに強まるばかりだ。

「なんで知ってる？ 攻略組の人間くらいしか俺のことは知らないはずぞ」

「知っているよ！ だって、今までずっと見てきたんだから！」

「……見てきた？」

「どういふことだ——見てきた、ずつと？」

「キリトとエムは特別だもん！ アタシたちみーんな、二人のことはずつと見てたんだ

よっ。」

空恐ろしくなる——アタシ、たち？

自分のことをも認知する監視者らの存在は、パラドに恐怖を抱かせるには十分だった。

「どういうことだ？」

「おしえな〜い」

凄んでみるもはぐらかされるばかりで、要領を得ない。

「お〜い？ 組まないの？」

当の本人であるストレアは、パラドの警戒心など何の苑だ。

「……ああ、よろしくな」

こうなれば、監視者を監視してやる。

そう意気込んだパラドは、ストレアの伸ばしてきた手を取った。

「こちらこそ、よろしくね！」

そんなパラドの思惑をよそに、ストレアは無邪気に笑む。

転移門広場から次々と迷宮区への攻略組のメンバーたち。パーティーを組んだパラドとストレアもその後を追う。

そして迷宮区の最深部までを行く道中で、パラドはリーダーであるアスナに声を掛け

た。

「なあ、アスナ」

「どうしたんですか、パラドさん？」

「偵察隊、今回も一応出したんだろ？　どんな感じだったんだ？」

「スカル・リーパーの前例があるので、部屋の外からしか確認してないから詳しいボスの戦い方とかはわからなかったんですけど——」

アスナからの情報纏めると、ボスは巨大な目に無数の触腕持ちのアンデット属性のモンスターらしい。

詳しい攻撃方法や配下のモンスターの有無等の情報は部屋の外からは観測できずに情報は無いが、一応の作戦は主な攻撃手段であろう触腕を斬り落とすことに専念。以上は敵の攻撃手段によってはアドリブで変更する可能性大の——要は行き当たりばったりだ、

「情報がないってのは、やっぱきついな……」

「ええ、バグの影響と結晶が使用できないことで無闇に偵察戦が行えないので……」

七十五層からボス戦の場は結晶アイテムが使用不能なのは変わらずで、それが大小様々と影響をきたしている。



ボス部屋手前の空間へと辿りついた攻略組。

装備の最終確認として準備を始めた面々。それらが終わる頃を見計らってアスナが声を掛ける。

「では、これより乗り込みます。生きて、次の層へ進みましょうー」

「「「「「おお!!」」」」

攻略組の士気は高い。これならば死者の出る戦いとはならないだろう。

皆の叫びに、こくりとひと頷きしたアスナはボス部屋の扉に手をかけた。

「扉が開いたら、一斉に飛び込んでパーティーごとに散開を!」

「「「「「了解!」」」」

地鳴りとともに開いていく石扉。

同時に点灯していく部屋の灯りとともに浮かび上がるボスの姿。

「きめエ……」

ボスの外観に対してそんな感想を漏らした声は、クラインの物だろうか。

情報では目玉に触腕の異形とのことだったが、炎に浮かぶ姿はパラドの想像の数倍は醜悪だ。

「うわあ……気持ちわる〜い」

隣に立つストレアも軽い口調ながらも嫌悪を口にする。

が、別にそんなことはパラドにとってはどうでもいい。戦えればそれでいいのだ。

「心が躍る……っ!」

ストレージからドライバーとガシヤットを取り出す。

「マックス大変身!」

ガシヤットをドライバーのスロットに装填し、レバーを開く。

『赤い拳強さ! 青いパズル連鎖! 赤と青の交差! パーフエクトノックアウト!!』

パラドは赤と青の戦士、パーフェクトノックアウトゲームレベル99に変身した。

「おお、すごいね〜」

その姿を見て、ストレアが歓喜の声を漏らす。

ようやく扉が開き切る、そのタイミングをじっと待つ。そして――

「総員、突撃!」

アスナの号令で攻略組全員がボス部屋内部へ突撃していく。

皆の目にボスの名前が映る《The Ghasstlygaze》――恐ろしい視線、そ

んな名の通りにぎよろりとした巨大な目を中心とし、そこから先端に口を模した器官を持つ無数の触腕を伸ばすおぞましい姿だ。

「うへえ、やつぱきめエ」

「好ましい見た目じゃねえな、ありやあ……」

クライン、エギルがボスの見た目に顔をしかめるが、態度とは裏腹に警戒は解いていない。

と、その時だ。ボスが突如と力を貯めるように目を細めた。

「来るぞ！ 避ける!!」

誰の叫びだろうか、言われずもがな七十五層と突破してきた攻略組の面々は急ぎボスの正面から飛び退く。

そこをボスの目から放たれた極太の光線が薙ぐ。

「距離をとつたらヤバそうだな……」

パラドがそう漏らすと、隣にいるアスナが叫ぶ。

「皆、一気に踏み込んで！」

距離を取つたら不利。そう結論付けたのだろう、一斉攻撃の指示を出した。

「」「了解！」「」

皆指示に従い、ボスとの距離を詰める。

無論、距離を詰めればボスの触腕での反撃がくるが、メインの攻撃は目からの光線なのか密度は薄い。

「タンク、受けて！」

素早くアスナによる指示が行われる。

対し、同じく素早く応じたタンク部隊が前に出る。

「ぐっ……まだ何とか受けられる！」

エギルが叫ぶ。

バグの影響による能力低下は大小問わず全員に見られたが、一先ずとボスに一撃を取られるといったことが無いことに安心する。

「続いて攻撃隊、各部位に対し攻撃を！ 反応があつた場合は即座にわたしに！」

出番だ。パラドはパラブレイガンを構えると、即座にボスの目玉——正面の危険地帯へ踏み込む。

「ハアッ!!」

一振り、ボスの目玉へ攻撃を加えると——ボスは絶叫のような、不快な声を発した。それに合わせ、触腕もうねるように不定形な動きから地団太踏むような感情的なものに変わる。

「成る程、弱点はあの目玉か」



この反応ならば、伝えることなくもアスナには伝わるだろう。

「目玉……皆！ 可能なら目玉を狙って！」

再度のアスナの指示。

狂乱するボスの攻撃をタンクが捌き、攻撃部隊が目へと攻撃を集中させる。

「いっくよ〜」

気の抜ける掛け声とともに、強烈な一撃をストレアがボスに叩き込む。

その一撃はボスに怯みを与えるには十分で、またその隙に皆が追撃を入れる。

「ヘッ！ 意外と楽勝じゃねーか」

クラインがそう叫ぶように、ボスのHPは徐々に徐々に減っていく。

とは言え、流石膨大なボスのHPだ。攻略組の総力によるここまでの攻撃でも二割を削るのがやっとだった。——と、その時だ。

「GUGYAAAAAAAAAAAAAAAA!!」

ボスがさらなる奇怪な叫び声を上げた。

と、同時オーラのようなものがボスの目玉から噴出する。

「なんだ!?!」

突然の事態に、パラドは驚きの声を漏らす。

が、すぐに状況を理解する——身体が、動かなかつたのだ。

「……………?!? 麻痺かー」

状態異常への対策手段は少ない。

現在、バグの影響はアイテムにまで影響を及ぼしており、品物として買えるアイテムの中には時間のかかる状態異常回復作用しかないポジションと、バカ高い上に毒消作用しかない解毒結晶のみだ。

更に麻痺とは最上位の状態異常だ。効果時間は他と比べて短いけれど、効果は驚異であらゆる行動が阻害される。

「ぐっ……………」

どうにかとパラドが目を配る。

他の皆も麻痺状態に陥っているのは死人が出てもおかしくない。が、見渡した限りでは麻痺に陥ったものは少ない。どうやらランダム効果で各状態異常が付与されたようだ。

「これなら……………」

どうにか戦える、かは微妙だが少なくとも負けが込むということはない筈だ。

とはいえ、付与される状態異常について適宜把握しなければ負けは必至だろう。

「……………面倒だな」

そんなぼやきが、パラドの口から洩れた。



ボス戦開始から数十分——幸運にも、これまでの戦いの中でHPをレッドゾーンにまで減らしたものはいいない。

だが、麻痺、出血、毒と様々の状態異常攻撃でじわじわと削られているため、回復アイテムの底が見え始め徐々に不利な展開となりつつある。

「こうなったら……」

これ以上戦いを長引かせるわけにはいかない。

周囲に散らばっているエナジーアイテムを確認し、最適な効果を探す。

やがて目当ての物を見つけると、パラドは叫んだ。

「よし、全員一旦離れろ！」

それを聞きつけたアスナも声を張る。

「皆、後退を！」

指示に際し、ボスの周囲に張り付くプレイヤーは急ぎ飛び退く。

そこへパラドが突っ込みエナジーアイテムを自身に引き当てる。

『停止』

アイテムの効果で己以外、周囲の時間を止める。

能力はクロノスの《ポーズ》に準ずるが、効果時間が十秒と定められているために早急に決めなければならない。

パラドはベルトを手早く操作すると、構える。

『ウラワザ！ KNOCK OUT CRITICAL SMASH！』

炎を宿した拳でパラドはボスの目玉を殴り飛ばす。

同時、停止の効果切れ、ボスは認知することの叶わない強烈な一撃にダウン状態となる。

そして、その隙を逃すアスナではない。

「今よ！ 一斉攻撃！」

指示の元、皆最大火力のソードスキルを発動させ、一気に突撃する。

凄まじい攻撃の数々に、ボスは残HPの半分を減らす。

「次で決めるっ！」

と、ベルトに手をかけるパラド。

その背後から、ストレアが軽い声で応じてくる。

「オツケー！ 任せてよ、パラド！」

「うおっ！ いつの間にも!？」

気配なく現れた声に思わず驚きを口にするパラドだが、当のストレアは気にしたげもない。

「そんなの良から決めるよ〜!」

そう無邪気に笑いながら両手剣を構えるストレアに苦笑しつつも、パラドは再びエナジーアイテムを自身に引き寄せる。

『マッスル化 マッスル化』

二つの効果を受けたパラドは、即座にベルトを操作する。

『ウラワザ! PERFECT KNOCK OUT CRITICAL BOMBER !!』

炎とパズルのエフェクトがパラドの身体を包む。

機を見計らって、飛び上がるとそのままボスに向かいバフの乗ったキックを放つ。

「いつけエ——!!」

無論、ボスとて必殺の一撃を甘受するわけはなく、抵抗として触腕を無数にパラドへ向けて伸ばしてくる。

しかしその程度で死ぬほどの威力ではなく、一瞬にして触腕を引きちぎるように突破すると必殺のキックをボスの身体へと叩き込む。

『GREAT!』

痛恨の一撃を示す音声とともに、パラドは着地する。

が、そこへボスの触腕が襲い掛かる。

「なに?！」

咄嗟のことに回避が遅れ、防御姿勢を取るも吹き飛ばされるパラド。

「浅かったか!!」

ダメージに喘ぐ中で漏らす。

どうやら、抵抗の末にキックの軌道をずらされ弱点部位の目玉を狙ったはずが外れていたようだ。

「でも、後一撃……っ!」

流石に痛恨の一撃。ボスの残HPは表示上一ミリも残っていない。

だが、すぐに動こうにも必殺技発動直後の無防備な瞬間を狙われ、軽度のスタンを起こしてしまっている。

さらに死にかけてとなったボスは最後の足掻きと残った触腕全てを遮二無二振り回しており、とても近づけたものではない。とそこへ――

「まっかせて〜!」

ストレアがボスに向かい走る。

「待てー！」

引き留めるべくパラドは叫ぶも、ストレアは止まらない。

無秩序に振るわれる触腕の攻撃の雨の中を、まるで予知しているかの如く躲し、とうとうボスの眼前にまで迫る。

「これで、トドメさー！」

そう可愛らしく告げるのとは裏腹に、構える両手剣から放たれるソードスキルは《ライトニング》。

両手剣の技としては数多い四連撃の重範囲ソードスキル。ただでさえ火力の高い両手剣スキルのそれらすべてをボスの目玉一点に叩き込むのだから、威力はオーバークイルものだろう。

たちまち、ポリゴンの欠片となって砕け散っていくボス。

同時に、周囲から安堵の——そして歓喜の声が上がる。バグの影響後初のボス戦にて死者ゼロで攻略を行えたことはそれほどの結果だ。

「ふう……」

疲労のため息とともにパラドが変身を解除すると、そこへストレアが近付く。

「お疲れさま。パラド」

「ああ……お疲れ」

笑みとともに手を振る少女には、悪意の類を感じない。

だが、それ故にパラドの中でのストレアへの疑念が強まる。

（あれだけ強いのに、なんでここまでストレアの名を一度も聞かなかった？ 少なから

ずあの目敏いヒースクリフが名を上げなかったというのは変だ）

上手く考えが纏まらない。エムがいたなら、もう少し……わがままは言えない。

とりあえずパラドは、上がる歓声の中をアクティベートの為に次の層への階段へと向かう。

「待つてよ〜！ パラド！」

それを目敏くストレアは引き止める。

「……何だ？」

「んふふ〜なんでもないよ。ちょっと待つてね！」

できれば今はストレアとは絡みたくない。

その意を込めながら言うが、ストレアは関係ないとばかりに無邪気に笑う。

と、突然パラドの目の前にトレードウインドウが現れる。

「これは、何だ？」

「ボスのL.Aボーナスだよ、アタシ要らないからあげる！」

まさか、パラドは驚きトレードウインドウのアイテムを見る。



LAボーナスは一つしかない物それを渡すとはどういう事か、問いただそうとウインドウから顔を上げると――

「……いない」

もう既に、ストレアの姿はどこにもなかった。

「あいつ……いったい何なんだ？ 何が目的だ？」

パラドの疑問に答える者はいなかった。

## 謎のPendant

——パラドがフロアボスと戦っている頃エム達も《ホロウ・エリア》攻略のため奮闘していた。



ホロウ・エリアの管理区に転移して早々、エムとキリトの二人はフィリアに連れられ、どこかに向かっていた。

「なあ、フィリアさん？」

そんな道中、キリトがフィリアに問いかけた。対して、レスポンスはそんなに早くない。

「………何？」

「俺たちどこに向かってんのか、いい加減教えてもらえませんか……？」

VR世界に疲れはないが、長々目的地も知らされず歩かされれば疲れもする。耐え切れず、キリトの問いかけだった。

「《二人が邂逅した教会》の奥に隠し扉を見つけたの、目的地はそこ」

フィリアの答え。と、それを聞いたエムが苦笑気味に呟く。

「凄い洒落た名前だね……」

「アイツらしいと言えば……まあ、らしいよな」

二人が邂逅した教会。そんな名前がついているということは、アイツ——ヒースクリフこと茅場晶彦は未開放に設定したエリアにまで律義に名前を付けていたことになる。律義な奴だ、と呆れ気味にキリトは同意した。

「？」

何のことだかさっぱりフィリアは首を傾げるしかなかった。

その後、フィリアに連れられるまま教会に入り、細々POPした敵を処理しつつ隠し扉があるという場所まで向かう一行。

教会を奥へ奥へと進み、たどり着いたのは教会最奥の礼拝堂の隅だ。

「……が、わたしの見つけた隠し扉」

「確かに、ここだけ床の色が違うね……」

と、エムが視線を落とすと、確かに隠し扉と目される場所だけ床の色がだけが赤い。「モンスターが待ち構えてるだろうし、気をつけて行くぞ」

キリトの忠言に、こくりと頷き合おうと三人は隠し扉の中へ一気に入り込む。

「敵は！」

「一体！ ゴーレム型!!」

即座の状況把握、敵は背後の宝箱を守護するように位置する石ゴーレムが一体。

そして恐らく、後ろの宝箱はフラグによるロックで、目の前のゴーレムを倒さなければ開かない。

「《The sanctuary》、聖域……この守護者だな」

石ゴーレム、《The sanctuary》は早速と唸りを上げ襲い掛かってくる。

三人は散らばりつつ、即座に壁役にキリト、ディーラーにエム、遊撃にフィリアと展開する。

「ゴーレム型には打撃属性以外は効き辛い、二人ともソードスキルは打撃属性を！」

「了解！」

エムの指示が飛び、そのまま消極的な戦闘が始まる。

石ゴーレムは固く、STRも高い。全員が軽装故に迂闊には近づけず、武器も皆剣な

のでじわりじわりとしかダメージを与えられない。

「……あんまり時間もかけてられないし、頭数を増やすか」

そんな戦闘が十分ほど続いた頃、ぼそりと呟いたエムが動いた。ストレージからゲーマドライバーを取り出し、マイティブラザーズXXを起動させる。

『マイティブラザーズXX！』

「あれ？ エム……それってパラドがいないと使えないんじゃないか？」

「まあ、見ててよ」

不安を口にするキリトに、エムはにやりと笑みを浮かべると、ガシヤットをベルトに挿入した。

「だくくい変身!!」

掛け声とともにレバーを展開、エフェクトがエムの身体を包む。

『俺がお前で！ お前が俺で！（ウィーアー！）マイティ！ マイティ！ ブラザーズ！（ハイ！）XX!!』

音声の完了とともに、ダブルアクションゲーマーレベルXXに強化変身を完了したエムたち。

「ええ!」

「超キョウリョクプレイでクリアしてやるぜ！」

キリト、フィリアの二人の驚愕の声を背に、いつもの決め台詞をキメるエムたち。

「じゃあー！ 行くぜ、俺!!」

Rのエムは、ガシャコンキースラッシュャーを呼び出しながら語調荒く、半身に呼び掛ける。

「はいー！」

Lのエムは、半身に応えるようにガシャコンブレイカーを構えると、二人同時に突撃していった。

そこからはエムの独壇場だ。パラドの時とはまた異なる、圧倒的なコンビネーションでゴーレムに攻撃をさせずに、抑え込んでいる。

「……なあ、エムさん？」

手隙となったキリトは、戦闘中のエムにふと問いかけた。

分身するだか、ロボになるだか、驚きには慣れているはずだったが、流石に……というわけだ。

ちなみにフィリアは理解が追いつかないのか、ただ啞然としている。

「何だ（かな）、キリト（君）？」

「うお!!」 同時に返事するなややこしい！ てか、どうなってるんだよ!!」

返事は二つ、語調は違えども声は同じなので耳が混乱してしまう。

「どうなってるって?」

改めて、Lのエムが返事をする。

「いやその形態って、パラドがいなきや使えないんじゃないのか?」

「ああ……」

「そーいや、特に言ったこともなかったな」

二人のエムが目を見合わせて、一瞬悩むがすぐにLのエムがまた答えた。

「じゃあ、とりあえず僕たちのことは後で。今は目の前に集中!」

「っしや、行くぜ!!」

「お、おう……」

得心ゆかぬ……そんな表情を浮かべるキリトだったが、エムの言うことも最もと納得したのか、改めて剣を構えるとゴーレムに突撃していった。



「うおりゃ!」

「ナイス！ 俺！」

あれから少し……十分程か、ゴーレムのHPがようやく三割に迫る。

無論、それには二人のエムの奮戦があればこそで、増えた手数を有用に活用していた。

「何か……もう、凄いな」

呆然と呟く、キリト。対し、たまたま側にいたフィリアもぼそりと震えた声で呟く。

「俺とか僕とか、自分同士なのによく一緒に戦えるわね……わたしだったら」

震える身体を隠すように腕を抱えるフィリア。

なにかあったのだろうか——問いかけようと、キリトは息を呑むがすぐにフィリアは頭を振った。

「なんでもない、わたしたちも行きましょう」

「ああ……」

生返事を返しつつ、既に短剣片手に突貫してしまったフィリアに追従するように、キリトは《ヴォーパル・ストライク》を起動させ、自身も突撃する。

戦闘は未だ続く。

HP三割を切つてからのゴーレムの抵抗が激しく、深く攻め入れないことが長時間戦



闘の要因だ。

だが、その状況の中でも二人のエムはゴーレムの重攻撃の隙を見て、見事な連携攻撃を見せる。

『マツスル化』

まず、Lのエムがアイテムで強化された筋力で、振り下げられたゴーレムの巨腕を無理矢理に跳ね上げる。

そして――

「オラツツ!!」

そこに滑り込むようにRのエムが飛び込むと、素体のスペックによるパワーで一気に斬り刻む。

無論、耐性の高いゴーレムなのでダメージは低いが、積み重ねられた攻撃もあり、HPは一割を割る。

「一気にトドメだ!　いくぜ、俺!!」

好機とみたLのエムがキースラツツシャーを構える。

「フィニッシュは必殺技で決まりですね!」

そして、答えるようにRのエムがホルダーからガシヤットを抜く。

『『ガシヤット!』』

二人のエムがキースラッシュャーのドロットにガシャットを挿入する。

『キメワザ！ ACT ION SPORTS CRITICAL FINISH!!』

音声の発動を確認したRのエムは、即座に突撃姿勢に入る。

それを見たLのエムが先に突撃して、まずゴーレムへの攪乱を行う。

「今！」

指示が飛び、Rのエムは一気に突貫する。

Lのエムの攪乱により、空いたゴーレムの防御の隙間を見事に突く。

「喰らえ!!」

キメワザの一刀がゴーレム身体を切り裂く。

残HPの一分がぐんぐんと減っていき……やがてゼロへと――

「っ!? 残った!」

ならなかった。手数は増えても、レベルXXでは総じて火力が足りなかったのだ。

退避するべくLのエムはすぐに動き出すも、ゴーレムが腕を振り上げるが早い。

「まずい! フィリア!!」

キリトは即座に動く。フィリアに呼びかけ、自身も出の速いスキルである《ソニック・

リープ》を起動させ、一気にゴーレムに迫る。

「うん!」

フィリアも、続くように打撃属性三連撃スキル《シャドウ・ステッチ》を構える。  
「届けッ!!」

エムに向かい振り下ろされる剛腕に、キリトは剣を間に合わせた。

衝撃とともにぶつかり合うが、ソードスキル行使の優先度が勝り、ゴーレムの剛腕を弾き返す。

「今だ！ フィリア!!」

「セヤアアアア!!」

怒涛の三連撃が、ゴーレムの体表を砕く。

HPを散らしたゴーレムは、その構造を保てなくなり自壊。次いで、残骸がポリゴンの欠片となって消滅した。

「……死ぬかと思った」

「ふう……」

二人のエムは互いに倒れ込みながら安堵の息を吐くと、変身を解除する。

「お疲れ、エム」

「お疲れさま、キリト君」

長時間の戦闘に互いに憔悴した面持ちだが、まだ笑顔を向けるだけの余力はある。

差し出されたキリトの手を借り、起き上がると早速フィリアの方は部屋の奥に出現し

た宝箱を鑑定しているようだった。

「中身の方はどうだ？ まさかトラップだったりは無いだろうけど」

「うん。トラップじゃなさそう」

「じゃ、とつとと中身見て帰ろうぜ」

キリトの進言にこくり頷いたフィリアは、一応警戒しつつ慎重に宝箱を開く。

ギイギイと軋みを上げて開かれた宝箱の中には、ペンダントが収納されていた。フィリアはそれを手に取ると鑑定スキルにかける。

「《虚光に燈る首飾り》……？ 装備アイテムじゃないみたい」

「つてことは、フラグアイテムなのかな？」

「だと思う。けど、ペンダントがフラグになるようなところはまだ見つかってない」

「てことは、まだ未探索のエリアか……」

「ここまで随分と探索したと思うんだけどね」

「でも、未開拓のエリアつてことは逆に範囲が絞れてるって事にもなるわね」

と、言い合う三人だったが、話はエムにメッセージが飛んできたことで一時中断される。

そのメッセージの送り主はパラドで、内容は七十六層攻略完了！ というものだった。

「とりあえず……今日はここで開きかな？　パラドたちも七十六層を突破したみたいだし」

「お、マジか！　じゃあ、どっちにしろ向こうで話を纏める必要がありそうだし、俺たちは先に戻るよ」

「うん。わたしのほうもできるだけだけ調査はしておく」

「悪いな、色々任せっぱなしで」

「いいよ。二人は血盟騎士団所属なんですよ？　ホントは階層攻略をしなきゃいけないのに、こっちに来てくれるだけでありがたい」

「いや、もう俺たち自由所属みたいな感じだから……」

「勧誘してきた団長がね」

苦笑し、どこか遠い目を見せる二人だが、やはりフィリアには意味が解らない。

そのまま話は流れ、三人は一度管理区に引き返すのだった。

——尚、その帰路にて思い出したかのようにキリトに先の件について触れられ、エムは面倒な説明を余儀なかうされたのはご愛嬌。

## AREA BOSSへの挑戦

謎のペンダントを入手して数日。

キリトがアスナとともに攻略して七十七層の攻略を進めていると、その間に先日教会にて発見したペンダントについての調査が終わったらしく、フィリアからメッセージが届いた。用件は簡潔、先日入手したペンダントについての続報が掴めたいらしい。

ただ、そこで問題が発生した。付随しての情報に、『今すぐ来て』と記されていたのだ。「うえっ!? 今からかよ……」

その内容にキリトは驚きを隠せない。

当然だ、今現在キリトはアスナと攻略<sup>デート</sup>しているのだ。

これを、呼び出しを理由に無碍にすればアスナが怒るのは必至。だが行かなければ、それはそれでフィリアが怒るのも必至。

いきなり突き付けられた究極の二択に、固まるキリト。そしてそれを不審に思ったアスナは首を傾げ、心配げに問う。

「キリト君、どうしたの?」

「いや、あの……アスナ、悪いんだけど……」

——誤魔化さなければ！

即座にその思考に至ったキリトは、どうにかうまいこと……と言葉を探るが、その様子はどう見ても挙動不審。

アスナはすぐにその理由に思い至り、その栗色の目を細める。

「ふーん。キリト君はわたしとの攻略デートをすつぽかしてまで、他の女の子のところに行くんだ？」

——今この状況で緊急の呼び出しなら、ホロウ・エリアにいるというフィリアのことだろう。

即座にそこまで辺りをつけたアスナは、自分でも自覚できるほどに棘を含んだ語調でキリトに訊ねた。

「で、デートって……確かに久しぶりの二人での攻略だけどき——」  
「っーん」

キリトが言い切るまでもなく、アスナに取りつく鳥などない。

「あ、アスナ……」

どうしようもないと、泣きそうな声になるキリト。

その姿を見て、アスナはしかたないと盛大なため息を吐く。

「はあ……もう今更だよね」

「アハハ……」

乾いた笑い、キリトは思わず目を逸らす。

呆れ半分、しようがなさ半分のアスナは先日リスが酒場で攻略パートナーがいないことを愚痴っていたことを思い出す。

「……ちようどリスがレベル上げしたいって言ってたし、わたしはそっちに行くから」  
「わ、悪い……」

許しを得れたと安堵の表情を浮かべるキリト。だが、アスナとてそのまま許すわけにはいかない。

攻略《デート》を無為にした分の対価はしっかりと払ってもらわなければならない——アスナはニコリと、キリトに微笑みかける。

「その代わり……今度新しく見つけたスイーツのお店、キリト君の驕りね？」

ケーキ一つ《ちゃんとしたデート一回》で許してあげるのだ。対価としては十分に安いだらう。

アスナはうんと一つ頷くと、もう一度キリトに微笑みかける。

「いいわよね？」

「え、ア……ハイ。わかりました」

思考の処理が終わったキリトが頷いたのは、すぐのこと。



「よろしい」

満足いく結果に、笑みを浮かべたアスナは足早にその場を去っていく。

取り残されたキリトは、ほの暗い迷宮区の通路に気落ちした様子で一人佇む。

「……フィリアのところ、行くか」

最後に、キリトのそんな呟きだけが辺りに深々と響き渡った。

そして、途中エムと合流したキリトは早々に《ホロウ・エリア》へと飛ぶと、フィリアに状況を訊ねた。

「で、そのペンダントが関係ありそうな場所はどこなんだよ？」

キリトの問う姿勢に肌を刺すような剣気が含まれており、若干気圧される他二人。

「……なんか、怒ってる？ キリト君」

「いや、別に」

エムが尋ねると、キリトはその針のような剣気を僅かに弱める。

「そ、そう……」

触らぬ神に祟りなし、そう感じたエムはこれ以上の追及はしない。

代わりにフィリアにちよつと説明を急ぐように視線を配る。

「……樹海エリアの西の端に神殿にペンダントと同じ形をしたくぼみがあったのよ」  
「神殿……?」

少し擦れ気味なフィリアの説明だったが、キリトの興味を引くには十分だったようで  
剣気はぱたりと収まる。

内心ほつと息を吐くと、フィリアはさらに説明を続ける。

「うん。次のエリアに繋がる橋の封印を解除できるのは……多分そこ」

「多分か……」

眉を顰めるキリト。

「でも、確証は高いんだよね?」

逆に、眉を開くエム。

「だから、行く価値は十分にある」

確信のフィリアの言葉に、エムとキリトの二人は共に笑みを見せる。

新エリア、神殿。戦闘狂に片足突っ込む二人には、そのどれもが魅力的な響きだ。

「よし、乗った」

勇み立ち上がるエム。

「俺も……早く帰って、アスナに謝らないと」

続くキリトだが、ぼそりと何かを呟いた。

「え？」

「ん、ああ！ なんでもない、行こうぜ！」

エムが問いかければ、嘘のような大声を上げて先を行くキリト。

「……キリト、そつち反対」

「え!!」

どうにも締まらない感じに、三人は神殿へと向かい始めた。



フィリアの案内で道中に苦戦らしい苦戦はなく、三人は『供物を捧げた神殿』へと辿り着く。

前回で赴いた教会とはまた趣が異なるものの、神聖さと異様さを合わせた雰囲気のある造りの建物には三人も意図せず唾を飲む。

「……この奥に、ペンダントと同じ窪みの扉があるの」

「なるほど……そこに、橋の封印を解く手掛かりがあるわけだ」

「そういうこと」

「じゃあ、行こうか」

そうして三人、互いに頷き合うと神殿内に乗り込むのだった。

「おりやああああー！」

怒涛の剣戟、二刀から紡がれる流れるような剣技で現れるモンスターの悉くを粉碎していくキリト。

その後ろを行くエムとフィリアには最早出る幕はなく、慣れた様子のエムは早々に剣を鞘に納めたが、フィリアの方は短剣を握ったまま軽く引いていた。

「なに、あれ……」

フィリアからそんな台詞が漏らされる合間にも、キリトの二刀は現れるモンスターを粉碎していく。

その様はスキルレベルがリセットされた筈だというのに、ゲームバランス崩壊級のものだ。

「あれは病気みたいなものだから……やらせとけばいいと思うよ？」

流星のエムもキリトのパーサクぶりに呆れているようだったが、それを聞いたのだろ

う戦闘中のキリトから苦言が飛ぶ。

「お前も似たようなもんだろ……自分だけ違うみたいに言うなよ！」

「……じゃあ、僕に代わってくれる？」

そうエムがからかうように返せば、キリトが苦い顔となる。

「も、もう少し」

思わず嘔き出してしまふエム。対し、フィリアは何とも言えない呆れ顔だ。

「もう、ただのバーサーカーじゃない……」

「あはは……否定は、しないかな、」

結局、その後の戦闘もキリトが請け負い、三人は無事に神殿の最奥までたどり着いた。赤い宝石を豪勢にあしらった黒鉄製の巨大な扉以外に何も無い空間。万が一に罠の可能性を考えて慎重に進むが、それ以上は特に何もなく、三人は最奥の扉の前に立つ。

「この扉……確かにペンダントと同じ形の窪みがあるね」

「橋に繋がる門にはペンダントと同じ紋様があったから、この部屋を調べれば行けると思う」

「……でも、確実にボスはいらるだろうなあ。しかも中ボスとかじゃなくて、ちゃんとした大ボスが」

「だよね……。本当なら、攻略組の皆を連れてきたいところだけ」

巨大な扉に守られる部屋の中、ボスの存在にエムが頭を悩ませた——その時。  
(なら、俺も混ぜてくれよ)

頭の中に声が響いた。

そして自身の内で跳ね上がる好奇の感情に、エムは自身の内にいる『相棒』の存在を  
認知する。

「パラド……わかった、久々に協力プレイだ」

口許を緩ませ、相棒の声に応じるエム。

その様子に、フィリアは訝しげにキリトに問う。

「……ねえ、エムは誰と話してるの?」

「ああ……まあ、すぐに出てくるよ」

曖昧なキリトの答えに、フィリアは首を傾げる。

「どういふこと?」

再度問うが、キリトからの答えはない。

仕方ないので、フィリアはエムに問おうと彼の方を見る。すると——

「うわっ!?!」

突如、エムの身体から粒子のようなものが吹き出し、それが瞬く間に人の形を形成した。

「エムと一緒に戦うのは久しぶりだなあ……心が躍るぜ」  
「そうだね……今日はよろしく、パラド」

現れた人型に平然と応じ、和気藹々と話し始めるエム。

それとは逆に、突然の状況に困惑し自失するフィリアの姿がそこにはあった。

「……………」

「お、おーい、フィリアさん？」

キリトの呼びかけで、どうにか正気を取り戻したフィリア。

困惑しきりといった様子で、現れた人型——パラドを指差しながら、漠然と問いかける。

「そ、その人は……？」

「あ、ああ……そういえば、言っていなかったね」

「俺はパラド。二人で一人の、永夢の相棒だ」

相棒はキリトじゃなかったのか——そんな思いが浮かぶが、様々処理が追い付いていないフィリアは曖昧に頷く。

「へ、へえ……」

「とりあえず、詳しいことは置いて早く行こうぜ」

キリトが促し、四人は連れ立って扉の中へと入っていく。

「そうやって侵入した扉の奥——ボス部屋と目される部屋は、相当に広い空間だが目ぼしい物は何もなく、当のボスの姿も確認できなかった。」

「ひゃく、馬鹿みたいに広いな」

「でもボスがいないな」

「設定ミス……なのかな？」

口々に言い合いながら部屋を探索する四人。

ひとしきりに気になると場所を調査するが、そのどれもフラグにならないのか、イベント又はボスが現れるような様子はない。

「……本当に、何も無いの？」

「そんな筈はないだろ、わざわざ部屋に入るのにペンダントを使ったんだ。ペンダントまでのクエストフラグは立ったし、何も無い筈が……」

キリトの言葉に皆一様に首を傾げるが、考えるだけではフラグは立たない。

「一回、ペンダントを見つけた教会に行ってみよう。もしかしたら何かあるかもしれないしね」

「エムが言うなら……行ってみようぜ」

「そうね、ここで無駄足踏んでたくはないし」

結局、一度この場での探索を諦め、ここまでのイベントを改め直すことにした。



ひとまず神殿を出よう……四人が大部屋の出口に向けて、歩き出したその時——  
「……っ!? 後ろ!!」

何かに気付いたフィリアが叫び、それに反応した三人は一気に飛び退く。

そこにほぼ間を置かずして、巨大な獣の爪が音もなく振るわれる。

「部屋を出ようとするのが、ボスの出現フラグとか陰湿すぎるだろ!!」

「ちよつと茅場の神経を疑うかな……」

「ゲンムといい勝負だぜ……」

流石の出来事に、皆から口々に茅場の呪う声上がるが、それでボスが消えてくれるわけではない。

四人は即座に体勢を立て直すと、抜刀。

先ほどの攻撃を放ってきた相手——ボス《The Shadow Phantas

m》へと向き直る。

「デカいな……」

キリトから、ため息交じりの声が漏れる。

そんなキリトの声に、改めてエムはボスの姿を観察する。

血色の肌をした、超巨大の四足歩行の獣。体中に鎖を巻き付け、頭頂部や胴体には巨大なクリスタルが突き刺さる。目や耳などの感覚器官に当たるものはなく、顔と思し

き場所に真一文に走る牙が覗く巨大な口だけが、唯一生物であると印象付けるような化物だ。

ボスが唸りを上げる。続けて、口を開くことなく爆発的な咆哮をあげ、その衝撃に四人はたじろぐ。

「ぐッ……せやああああ!!」

そんな咆哮の中を、キリトは叫びと共に強引に突破し、右前足の腱に向けて一閃を放つ。

が、キリトの攻撃はボスの強靱な筋肉に阻まれて刃を通さない。

「マジかよっ!?!」

パラドが驚きの声を上げた。

ダメージディーラー  
攻撃特化仕様のキリトの攻撃ですら意に介していないというのは、初撃で得られた情報として嬉しいものではない。

続く二撃、三撃をキリトが放つ中、エムは大きく息を吸うと叫んだ。

「……僕がボスのヘイトを稼ぐから、キリト君が攻撃、フィリアさんが遊撃、パラドは後ろで援護を頼む!」

「了解!」

「わかった」

「心が躍るな……！」

三人が了解の意を示し、エムとパラドの二人はガシャットを構える。

「変身！」

『レベルアップ！ シャカリキ！ シャカリキ！ バッドバッド！ シャカつとり  
キつと シャカリキスポーツ！』

『DUAL UP！ Get the glory in the chain！ P  
ERFECT PUZZLE！』

こうして、ボス《The Shadow Phantomasm》攻略戦の幕が開かれた。



ボスとの戦いは既に半時間を超えた。

攻撃には隙が無く、合間合間に使ってくる攻撃技も範囲技や陰に潜んでの潜伏技、その他にも周辺にダメージ床を残す技等があり、中々ダメージディラーであるキリトが踏み込めないのが原因だ。

と、そうしてる間にもボスは、後ろ脚だけで立ち上がった——これは範囲攻撃の予備動作だ。

「範囲攻撃だ、離れろ!!」

それに、いち早く気がついたパラドが叫び、皆一斉に距離を取る。

同時、ボスの周囲に影の柱が現れ、辺り一面を暗黒で包む。

「くそっ! こつち近づかなきゃ、まともに攻撃できないっつてのに……」

愚痴漏らすキリト。対しエムは、仮面の下で不敵な笑みを見せる。

「それなら、俺に手がある!」

そうしてエムは肩の車輪を抜くと、ガシヤットをキメワザホルダーに挿入した。

『キメワザ!』

「エム、どうするんだ?」

「まあ、見てろって」

問うてきたキリトに軽快に答えると、エムはパラドに呼びかけた。

「パラド!」

「行くぜ、エム!」

心得たと、パラドはパズルゲームの能力でエナジーアイテムを操作し、エムにエナジーアイテムを弾く。

『音速化！ 金剛化！ 剛力化！』

効果を受けたエムは、車輪を構えるとホルダーのスイッチを押す。

『SHAKARIKI CRITICAL STRIKE!』

エナジーアイテムの力により強化された車輪は——威力と、硬度と、速度を持って、ボスを襲う。

『GREAT!』

その威力は、ボスの巨体を容易く吹き飛ばし、三本あるHPバーの内の一本をあつという間に削り去る。

「よっし！ 残り一本!!」

だが、喜ぶのも束の間だった。

吹き飛ばしたはずのボスは、その巨体を躍らせると、先刻のように爆発的な咆哮を上げた。

「な、なんだ……っ!？」

だが、先刻と違い、目も開けてられないほどの衝撃に皆が動けずにいると、ボスの姿に変化が起きた。

なんと、体に巻き付いていた鎖が拘束具ごと全て外れたのだ。

「鎖が……外れた？」

変化は続く。拘束具が外れると同時に、今まで咆哮の際ですら開かれることのなかったボスの真一文に走る口が開いたのだ。

「うわっ、口の中グロいな……」

「感想、言ってる暇ないよ」

思わず引くキリトにフィリアが突っ込んだ、一瞬の後。

ボスは先ほどもまでは比喩物にならないほどの速度で、四人に突撃してきた。

「みたいだなあ!!」

回避しながら叫ぶキリト。

「いや、早すぎだろ!?!」

エムも釣られるように叫ぶ。

その間にも、ボスは怒涛の速度と剛腕で次々と攻撃を仕掛けてくる。

「うおっ!?! ギリギリセーフ!」

更に拘束具から解き放たれたことにより開かれた口でも、エムたちを嘔み殺そうと喰らいつついてくる。

それを咄嗟に回避するエムだったが、尚も続く密度の攻撃に成す術がない。

「これはキツイな……」

あまりのボス《The Shadow Phantomasm》の強さに、天を仰ぐエム



## St t e l e m e n t 《シャドウ・ファンタズム》

——ボス《The Shadow Phantomasm》との戦いは、現在エムたちが圧倒的に不利な状況で進んでいた。

「範囲攻撃だ、避けるろ！」

ダメージディーラーとして、前線を張るキリトがボスの予備動作に気がつき、咄嗟に全員に指示を出す。

それに応じ、各々が回避行動をとったと同時に、ボスが後ろ足で立ち上がる。

「影だ！ 全力で後ろに跳べ!!」

ボスが前足を地面に叩きつけ、その周囲に影の柱が乱立する。

それをどうにか回避する一同だが、ボスの苛烈な攻撃を前に、踏み込めないのが現状。鎖が解き放たれてから約半時間、未だにボスは倒せていない。

「これじゃあ、いつまで経っても倒せない……」

「近づかなきゃ攻撃できないが……あれだけ攻撃が激しいと迂闊に近寄れないな」



フィリアが嘆き、エムも舌打ち気味に愚痴垂れる。

「投擲スキルじゃ火力が足りないし……弾もない。結構詰んでるだろ、コレ……」

「俺たちも変身したら銃はあるけど、特化じゃないから火力が足りないしな」

どうにか打開策を探るキリトとそれに続くパラドだが、純然たる火力不足に頭を悩ませる。

その時、エムが何か思いついたように、ベルトを操作し、スポーツゲームマの装備を解除する。

「よし、ならこの前追加されたガシヤットでいくぜ！」

そして、オレンジ色のガシヤットを取り出すと、スイッチを押し起動させる。

『ジェットコンバット！』

起動したゲーム画面から、両翼にガトリング砲を装備したジェット機《コンバットゲーム》が飛び出す。

「大・大・大変身！」

いつもの掛け声とともにガシヤットを挿入。ベルトのレバーを展開し、コンバットゲームをその身に纏う。

『アガツチャ！ ジェット！ ジェット！ イン・ザ・スカイ！ ジェットジェット！ ジェットコンバット！』

エグゼイドは、レベル2から高い連射能力と威力をもつガトリング砲「ガトリングコンバット」と飛行ユニットを装備する《コンバットアクションゲーマー レベル3》へと強化変身を果たした。

「今度は、なに？」

「あれは俺も初めて見るな……」

「ジエットコンバット……そういうことかエム」

エグゼイドの新形態にフィリアとキリトは困惑しきりだが、パラドの方は既にエムに合わせるべく準備を始めていた。

「マックス大変身！」

『赤い拳強さ！ 青いパズル連鎖！ 赤と青の交差！ パーフエクトノックアウト!!』

レベル99へ強化変身し、手元にパラブレイガンを構えると、ボスに向かい銃モードで連射し始めた。

「エム！ こつちでタゲは取るから、一気に決めろ！」

「オツケー!!」

パラドの進言に、叫びながら答えると、エムは背中のブースターを一気に吹かし、飛び上がった。

「と、飛んだ!?!」

今まで平面での戦闘を強いられていたキリトとフィリア。いきなりの空間を最大活用できる飛行という概念の登場に驚愕を隠せていない。

「これでも喰らえ！」

と、そんな地上を余所に、空を駆けるエムは両手に装着されたガトリングから凄まじい量の弾丸をボスに叩き込む。

「ええ……」

「もう、これはチートだね」

あまりに一方的な展開に、キリトもフィリアも最早呆然となるしかない。

そんな中、ボスは空駆けるエムに対し、範囲攻撃で攻撃を加えようと、後ろ脚だけで立ち上がる。

「待つてました！」

と、そこでパラドが一気に踏みこむ。

『ズ・ゴーン！』

パラブレイガンを変形させ、Bボタンを連打する。

『1・2・3・4・5・6』

「喰らえ！」

振りかぶり、通り抜けざまに後右足を痛烈に強打する。

『6連打!』

痛打に、ボスは体勢を大きく崩され、範囲攻撃はキャンセルされる。

更に、そこへ上空からガトリングの掃射が畳みかけられる。

「これ、わたしたちも戦う必要がある?」

「あの二人で大丈夫だろ……」

エムとパラドの二人の攻撃にフィリアは呆然としキリトは放棄状態だ。

「いつけエ——!!」

コンバットアクションゲーマーの装備であるガトリングの斉射を続けるエム。

勿論、ボスの方もそれをみすみすと見過ごすはずもなく、上空までを貫く影の範囲攻撃を駆使し、エムを撃ち落とそうとしてくるのだが、飛行しているためにそれが当たることはない。

逆に、エムの攻撃は確実にボスに命中し続けているのだが、レベル3であるが故に攻撃力が足りずに既にかかなりの長期戦になっている。

「グウルアアアアアア!!」

ボスが吼える。

これは範囲攻撃の合図だ。

「いけ、パラド！」

エムが指示を飛ばすと、パラドは一気に駆け出した。

そして腰元のベルトを操作する。

『PERFECT CRITICAL COMBO!』

「喰らえ！」

飛び上がり、立ち上がるボスの脚に目掛けて蹴りを叩き込む。

その威力に攻撃は中断され、膝を折ったボスはダウン状態となる。

「エム！」

「ああ、フィニッシュだ」

それを好機とみた二人は一斉に最大火力を準備する。

『ズ・ガンン!』

パラドはパラブレイガンを変形させると、構える。

『鋼鉄化! 分身!』

更にエナジーアイテムを自身に引き寄せ、鋼鉄化をパラブレイガンに分身を自身に適用して強化する。

そして、空飛ぶエムと共にホルダーにガシヤットを挿す。

『キメワザ!』

エネルギーがそれぞれ、ガトリングユニットとパラブレイガンに収束する。

そして、エネルギーが溜まり切ったところで二人は引き金を引く。

『JET CRITICAL STRIKE!』

『PERFECT CRITICAL FINISH!』

エムは、その身を躍らせた空中から背後に負うガトリングユニットから数多の弾丸を放ち、続くようにゲームの本体からミサイルを撃ちだす。

そしてパラドは、アイテムの効果で分身しつつ、同じくアイテム効果で徹甲弾と化した弾丸を一斉に放つ。

「グウアアアアアアアア!!」

二人の攻撃は、ボスの残ったHPバーの最後の一本を見事に吹き飛ばし、その姿はポリゴンの欠片となって霧散する。

「よっしゃあ、ゲームクリアだ!」

「……なんとか終わったな、エム」

「ああ!」

一時間近くを使い、ようやくとボスを打倒できた。

エムとパラドは、それを拳を躡して喜び合う。そんな二人を、キリトとフィリアの二人が遠巻きに見つめていた。

「あの二人、ていうかこれはわたし達がおかしいの？」

「もうゲームバランス崩壊ものだな……」

二人の余りの異次元ぶりにフィリアは唾然。慣れている筈のキリトも、驚愕を隠せずにいる有様だ。

と、そんなキリトだったが、フィリアのとある異常に気が付き、そのことを彼女に問いかける。

「……なあ、フィリアのペンダント光ってないか？」

「本当だ……光ってる」

フィリアの異常、身に着けていたペンダントの発光。これが意味するものは――

「これなら、門が開くかもしれないね」

「門？」

「樹海エリアの先に通れない門があつて、もしかしたらそこから新しいエリアに進めるかもしれない」

キリトたちが来れない間にも、フィリアはホロウ・エリアの探索をしていたようだ。

今しがた攻略した神殿とは別に、さらにペンダントと関連していそうな門を見つけていたらしい。

「そうか。でも、今日はもう無理かな……」

「うん、わたしも今日はいいかな……」

ボスとの一時間を超す戦闘の疲れで、二人はもうヘトヘトだ。

「あつちの二人は……まだ戦えそうだけどね」

フィリアの指し示す方では、エムとパラドの二人が《シャドウファンタズム》を倒したことによる高揚からか先ほどまでの長期戦が嘘のように余裕そうである。

「……取り敢えず、明日その門のある場所に案内してくれ」

「わかった」

翌日に備えの、帰り道。四人の前に現れたモンスターは全てエムとパラドの手によって倒されていった。

「……やっぱり、みんなバーサーカーだった……」



## 短編など

## 特別回

スゲームエリアへ

「絶対に勝つ！ 皆で帰るんだっ!!」

コウガが強く宣言し、皆もそれに頷く。

「果たして君達は魔王である僕に勝てるのかなあ!!?」

ナーヴギアを装着し、死のゲーム《ソードアート・オンライン》の再現となったこのラストバトル。

自分、そして仲間の運命が懸かった決して負けられない戦いだということ——それはこの場にいる全員がわかっていた。

「彼らの運命は僕達が変わえる！」

エムは目の前の仲間の命を救うため、やはり強く宣言した。

「いくよ！ キリト君！」

「ああ！任せろ！」

そしてエムとキリト達はラスボスである《ザ・ゲームマスター》に向かっていく。

「コウガ君！ 君はイツキのもとへ向かうんだ！ 此処は僕達に任せて！」

「でも……」

「いいから向かうんだ！」

エムは、コウガに全ての決着を託した。

「わかった！絶対に帰ろう！」

託されたコウガは、イツキがいる場所目掛けてUFGを放ち、飛んでいった。

「キリト君、僕たちはこいつを倒そう！」

「ああ！」

それを見送ったエムとキリトは、共に高揚感からくる笑みを浮かべ、手を差し出す。

「超キョウリョクプレイでクリアしてやるぜっ!!」

その手を叩き合わせ、エムとキリトは目の前のエネミー《ザ・ゲームマスター》に向かっていた。

そしてコウガ達を救う為に集まった仲間たちもそれに続く。

コウガは、魔王を自称するイツキの前に立つ。

「イツキ……何でこんなことを……」

「僕は魔王だと言っただろ。魔王は欲しいものはどんな手を使ってでも手に入れる」

イツキは本当の魔王のように高揚と笑みを浮かべ、悦に浸るような邪悪な表情も見せる。

「……そのために、クレハとツエリスカを巻き込んだのか……！」

——大切な幼馴染みで、自分をこの世界に誘《いざな》ってくれたクレハ。

——GGOにログインして間もない自分を助けてくれたツェリスカ。

二人への様々な想いが溢れ、今にも決壊しそうなコウガは苦し気に叫ぶ。

「そうだよ！ 人間不信に陥った君を僕だけの物にするためにね！」

イツキは開き直ったのかのように狂喜な笑みを浮かべ、叫び返す。

「僕は魔王だ……。魔王は魔王らしく、その務めを果たさせてもらおうよ！」

イツキは装備しているスナイパーライフルを構えて、コウガ目掛けて放った。

それを間一髪の所で回避し、コウガは自分の装備している光剣《マサムネG9》を右手に構え、左手に拳銃を構えた。

「そうだ……。君は勇者らしく魔王である僕にかかってきなよ！」

「僕は……。イツキ、君を止める！」

——全ての運命を掛けたラストバトルが始まった。



「こ、これは……」

『私の才能を持つてすれば容易い!! 私からの恵みをありがたく受けとるといい!!』

「はい!ありがとうございます!」

手の平返したが、有難いものは有難い。

早速とゲーマードライバーを腰に巻き、マキシマムとムテキガシャットの起動スイッチを押す。

『マキシマムマイティX! ハイパームテキ!』

「彼らの運命は……俺が変わる!!!」

『マキシマムガシャット!』

「ハイパー大变身!!!」

『パッカーン! ムーキーキー!! 輝け流星の如く! 黄金の最強ゲーマー! ハイ

パームテキエグゼイド!!!』

エフェクト光がエムの身体を包み込み、それが晴れた時、エムはもうひとつの姿《仮面ライダーエグゼイド ムテキゲーマー》に変身した。

『ガシャコンキースラッシュャー!』

「ノーコンティニューでクリアしてやるぜ!!!」

エム——改めエグゼイドは手元に召喚した武器を取り、目の前にいる《ザ・ゲームマ

スター》にそう宣言した。

『ズキュ・キュ・キューン!』

ガシヤコンキースラツシヤーをガンモードにして《ザ・ゲームマスター》目掛けてエ  
ネルギー弾を放った。

「何なのあの姿……」

「あんなもの実装した覚えはないわ……」

「いったいどうなってやがる……」

エグゼイドの姿を初めて見たクレハとツエリスカ、ジヨーは驚きを隠せないようだった。だが、そんなことは関係ないとばかりにエムは《ザ・ゲームマスター》に向かって、突撃する。

「タゲは俺が取るから任せろ!」

《ザ・ゲームマスター》とエグゼイド ムテキゲーマーの最終決戦が今、新たに始まるう  
としていた。

——そしてコウガとイツキの戦いも続いていった。

イツキは驚異的速度でコウガを狙い撃ち、コウガはその銃弾を回避するか光剣で防ぐかのギリギリの戦いが続いていた。

「いつまでこの攻撃に耐えられるかなあ?！」

イツキは狂氣的に笑いながら、ライフルを撃ち続ける。

それを避けるコウガだが、イツキの狙いの速度は速く、バレットラインがあるとは言え回避、防ぐのは容易ではなかった。

(このままじゃ、いずれ攻撃を受ける……こうなったらー！)

コウガは起死回生を狙って、光剣を構えながらイツキ目指し真っ直ぐ向かって走り出した。

「そう来るか……ならー！」

イツキは真っ直ぐ向かい来るコウガに目掛けてスナイパーライフルを構えた。

狙うまでもなくスナイパーライフルの必中距離のために、バレットラインが見えてからでは絶対に回避出来ない。だが、コウガはキリトに光剣での戦い方を教えてもらった時に言われた事を思い出していた。

『バレットラインを見て避けるんじゃない相手の目を見て避けるんだ』

キリト曰く《ザ・シード》共通のシステムで攻撃する際には狙った位置に目も追従す



るらしく、それを見れば何処に攻撃が来るか分かるらしい。

コウガはその練習をしたが目を見て避ける事は出来なかった。しかし、この状況では相手の目を見て避けるしかなく、一か八かの賭けだった。コウガは神経をスナイパーライフルを構えるイツキのスコープ越しの目に集中する。

「――終わりだ」

イツキの勝ちを確信した冷静な声が響き、スナイパーライフルから銃弾が放たれ、コウガに命中するかと思われた――が、コウガに命中することなく銃弾は光剣によって防がれた。

「何ッ!?!」

イツキは必中距離である筈の銃弾を防がれたことに驚愕した。

そしてコウガはその隙に一気に接近しイツキに斬りかかるが、イツキはスナイパーライフルを盾代わりに投げ捨て、続いて腰に装備していたハンドガンでコウガを撃つた。そしてコウガは間一髪の所を光剣で防いだが、一部が光剣の穂に当たってしまい、それによりコウガの光剣《マサムネG9》はお釈迦となる。

互いに装備しているのはハンドガン一つだけとなる。コウガは両手に、イツキは左手にハンドガンを構え、正対する。

——そしてエム達の《ザ・ゲームマスター》との戦いはいよいよ決着がつこうとしていた。

HPを減じたゲームマスターは、一気に上昇して口許にエネルギーを貯める。

「あんなの受けたら一溜まりもないわ……」

「私達……までなの……」

《ザ・ゲームマスター》が溜めている強力なエネルギーを前に、心の折れかけている者もいたが、まだ諦めていない者がいた。

「諦めるな！ あのエネミーの顔目掛けて撃つんだ!!」

——キリトだ。SAOを生き残ってクリアした者だからこそ、まだ諦めていなかったのだ。

キリトの声は全員の胸の内を揺さぶり、一齐に《ザ・ゲームマスター》がエネルギーを溜めている顔目掛けて撃ち出した。

だが、惜しくも怯ませることは叶わず、《ザ・ゲームマスター》はフィールド全体に巨大なレーザーを放とうとする。その様子を見て、さすがの誰もが諦めていたが『彼』だけは「まだだ」と足掻く。

「変えられない運命なんてない！俺が皆の運命を変えてみせる!!!」

エムはそう叫び上空にいる《ザ・ゲームマスター》に向かって飛び出した。

「エム!!」

『エム(さん)!!』

今まさに放たれようとしているレーザーを目の前にしながら、ドライバー上部にあるガシヤットのスイツチを押した。

『キメワザ！ HYPER CRITICAL SPARKING!!!』

武器を放り捨て、独特の構えで右足にエネルギーを貯める。

そして、同じタイミングで共にエネルギーを貯め終え、エグゼイドは飛び出し蹴りの体勢に入る。

「行つけエ——!!!」

《ザ・ゲームマスター》もレーザーを放ち、エグゼイドの黄金の煌めきを放つキックが衝突し互いに拮抗する。

「俺は……命を諦めない！運命は俺が変える!!!」

「行っけエ—— エム!!」

「頑張つて!! エムさん!!」

『負けるな! エム(さん)!!』

フィールドにいる皆はエムを信じ、叫ぶ。

そして、その叫びはエムに力を与え《ザ・ゲームマスター》のレーザーを押し返し始めた。

「うおおお!!」

そしてレーザーを打ち破り《ザ・ゲームマスター》にエグゼイドのキメワザがヒットする。

そしてキメワザが命中した《ザ・ゲームマスター》にHIT!の文字がいくつも浮かび上がりHIT!の文字によって被われ次第にGREAT!になり最後にPERFECT!の文字が大きく浮かび上がった。

『究極の一発!! 完全勝利!!』

音声 that 響き渡り《ザ・ゲームマスター》はポリゴン片となり消滅した。

エムとキリト達は勝利の喜びを分かち合おうとした瞬間、警告音と共に女性の合成音声 that 響き渡る。

『システムの重大違反確認 システム権限を停止します』

そして全員光に包まれ始め消えていった。

——《ザ・ゲームマスター》との決着が付く少し前

イツキとコウガ互いにハンドガンを構え、正対する中でイツキはふと気付いた。

「その銃は……!?!」

「イツキが僕にくれた銃だよ」

「持っていてくれてたんだね……。はあく魔王の企みは大失敗だったよ……」

イツキは額に手を当て、落胆した様な声と表情で言った。

コウガは、これを機と銃を下ろしてイツキに向かい叫ぶ。

「イツキ……僕は君の事は大切な仲間だと思っている、だから……!!」

「もう遅いよ……魔王を倒すのは勇者の務めだ」

イツキはコウガの話を冷淡に遮り、銃を構えた。

——だが、コウガはそれでも銃を構えない。

「君が務めを果たせないなら……僕が！」

イツキが銃をコウガに向けた直後、

『システムの重大違反確認 システム権限を停止します。』

警告音と共にシステムアナウンスが響き出した。

「時間切れ……か」

「イツキ！」

「……また、会いに来るよ。現実世界か仮想世界かわからないけど……だって、君が仮想世界に来た理由を聞いてないからね」

それだけを言い残し、イツキは消え、その数秒後コウガの視界は真っ白に染まった。

# 特別企画平成ジェネレーションズForever公開記

## 念回 前半編

永夢 「激動の平成仮面ライダー紹介！」

作者 『最初に言っておくこの話は一か一かナリメタいつ！』

永夢 「いきなりかましにきた!?!」

作者 『いいじゃん！電王世代なんだから！』

永夢 「そんなことよりコーナーの説明を」

作者 『おっと…忘れてた。このコーナーは激動の平成仮面ライダーの解説していこうというコーナーで私、パロドファンとゲストの仮面ライダーエグゼイド宝条永夢さんの二人で進めていきます。』

永夢 「よろしくお願ひします。作者さんに早速聞きたいことがあるですけど」

作者 『なんですか？』

永夢 「名前のパロドファンの由来ですが……」

作者 『ああ、永夢の思つての通りパロドが好きだからだ。パロドのファンと言うことでパロドファンって名前にしたんです。』

永夢「パラドが好きになったきっかけは何ですか？」

作者『18話での黎斗に切れて殴ったシーンを見てからパラドが好きになってパラドの活躍が楽しみでパーフェクトノックアウトゲームの初登場はマックス大興奮しました。後、永夢とパラドの協力プレイでのクロノスの戦いは何度でも見直すほど興奮して一番好きなシーンですね。それにトゥルーエンディングでの登場の仕方も格好いし何より変身音声も格好いいから好きなんですよ。ただ残念なのは平成ジェネレーションズF a i n i で仮面ライダーパラドクスに変身しなかった事と仮面ライダージオウで登場しなかったことですね。本当に……』

永夢「もう良いです！ コーナーが始まりません！」

作者『つい喋りすぎてしまったようだそれでは……』

作者・永夢『「激動の平成仮面ライダー紹介スタートです。」』

『平成ジェネレーションズForever公開記念激動の平成仮面ライダー紹介』

作者『最初に言っておくいくつかはインターネットで調べてから書いた。理由は……』



見ていないのが有るからだ！特に序盤のやつ！』

永夢「それでは、最初の平成仮面ライダーは仮面ライダークウガ」

作者『2000年から2001年に放送されキャッチコピーは「A New Hero. A New Legend.」（新しい英雄、新しい伝説）で物語は2000年に長野県山中の九郎ヶ岳で謎の遺跡が発掘され、棺の蓋を開けたことで目覚めたしまったグロンギによって、夏目幸吉教授らの調査団は全滅してしまい捜査に当たった長野県警刑事・一条薫は五代雄介と名乗る冒険家の青年と出会う。五代雄介はそこで見せてもらった証拠品のベルト状の遺物から、戦士のイメージを感じ取りグロンギ……ズ・グムン・バに遭遇した雄介は、咄嗟の判断でベルト……アークルを装着して仮面ライダークウガへと変身した。そして、人々の笑顔を守るためにグロンギと戦うことを決意する。以後、クウガとグロンギは「未確認生命体」と呼ばれ、人々に認知されてい戦いが始まる。』

永夢「笑顔を守るため……僕と同じだなあ」

作者『そうですね……。僕の生まれた翌年に放送されたからよく覚えていないんですが親からはテレビを見てクウガって言っていたと聞いています。』

永夢「作者さんの最初に見た仮面ライダーはクウガなんですね。」

作者『全く覚えてないけどね。放送始まった当時の時は生後11カ月だし』

永夢「あつ……で、では気を取り直して次の平成仮面ライダーは」

作者『二代目平成ライダーは仮面ライダーアギト』

永夢「キヤッチコピーは「目覚める、その魂」です。仮面ライダークウガの「未確認生命体事件」の終息から2年後、沖縄県の与那国島海岸に人知を超えた謎の遺物・オーパーツが流れてき同時に各地では、人間には不可能な殺害方法を用いた猟奇的連続殺人事件が発生し警視庁はこの事件の犯人を、かつての「未確認生命体」グロンギを超える新たな脅威として「アンノウン」と命名し、未確認生命体対策班（SAUL）に専属捜査を命じる。SAULに配属された若き特務刑事・氷川誠：仮面ライダーG3、瀕死の重傷を克服した後に変容していく自らの肉体に恐怖を抱く大学生・葦原涼：仮面ライダーギルス、そして記憶喪失でありながらも本能の赴くままにアンノウンを倒していく家事手伝いの青年・津上翔一……仮面ライダーアギト、三人の仮面ライダー物語です。」

作者『アギトは映画しか見ていながら殆どインターネット任せだ！クウガもね！』

永夢「言わなくて良いです！ そんなことよりちゃんとしましょう！」

作者『それじゃあ、気を取り直して……仮面ライダーアギトから2号、3号ライダーの登場が始まりだしたね。永夢達のような仮面ライダーが複数登場する切っ掛けとなりそれに次では……』

永夢「適当過ぎませんか……えー次の平成仮面ライダーは」

作者『三代目平成仮面ライダー』は仮面ライダー龍騎、物語は2002年に街では、人々が忽然と失踪する事件が連続発生していた。真相を追うネットニュース配信社の「OR Eジャーナル」に所属している見習い記者、城戸真司は失踪者の部屋を取材中に奇妙なカードデッキを発見する。そして謎の龍を目撃する。発見した謎のカードデッキの力で仮面の戦士に変身してしまった城戸真司は、鏡の中の世界に迷い込み、自分と同じような仮面の戦士がモンスターと戦う光景を目撃する。命からがら現実世界に帰還した城戸真司は、もう一人の仮面の戦士である秋山蓮と、彼と行動を共にしている神崎優衣から、ミラーワールドとミラーモンスター、そして仮面ライダーの存在を知る。連続失踪事件はミラーモンスターによる捕食で仮面ライダーはミラーモンスターの力を使うことができる超人であることを知る。ミラーモンスターから人々を守る決意をして真司もミラーモンスター…無双龍ドラグレッツダーと契約し、正式な仮面ライダー龍騎となるが、仮面ライダーナイトこと秋山蓮は、城戸真司と共闘するどころか「龍騎を潰す」と告げて襲いかかる。仮面ライダーは全部で13人、それぞれの目的のために、最後の一人になるまで戦わなければならないという宿命の中で城戸真司はミラーモンスターと戦いながらライダーバトルも止めようとするが、真司の願いとは裏腹にライダーバトルは繰り返されしまう。』

永夢「ライダー同士での対決……僕達と近いですね。」

作者『近いと思いますよ。ラスボスもクロノス同様のチート能力でしたし』

永夢「それに仮面ライダーが13人もいるなんて……覚えるの大変そうですね。」

作者『えーっと、龍騎、ナイト、ゾルダ、王蛇、シザース、ライア、ガイ、ファム、リュウガ、タイガ、インペラー、ベルデだね。永夢と会ったことある仮面ライダーが一人いるね。』

永夢「仮面ライダーゾルダ北岡さんとはスーパーヒーロー対戦でゴライダーとして一緒に戦ってくれました。」

作者『さあ次の平成仮面ライダーの紹介といきます続いての平成仮面ライダーは…』

永夢「4代目平成仮面ライダーは仮面ライダーファイズ。キャッチコピーは「疾走する本能」。物語は2003年。九州で一人旅をしていた青年乾巧は、そこに居合わせた園田真理とともに、謎の怪人オルフェノクに襲われる。園田真理は持っていたベルトを装着されて仮面ライダーファイズに変身しようとするが失敗し、無理やり乾巧にベルトを装着させて、仮面ライダーファイズに変身させることで窮地を脱します。オルフェノクは、ベルトを狙って園田真理を襲い。その後二人はクリーニング屋の菊池啓太郎と出逢い、事情を知った彼の勧めで東京にある彼の家で3人の共同生活を始めることになる。一方、東京で暮らしていた青年木場勇治は、2年前の居眠り運転トラックによる交通事故によって両親を失い、自らも2年間の昏睡状態を経て死亡したかに見えた。しか

し、勇治は病院で謎の蘇生を遂げ、周囲を混乱させる。自らも混乱したまま帰宅する木場勇治だったが、自宅は既に他人のものとなっていた。叔父一家が自分が眠っている間に財産を根こそぎ利用していた事実を知り、恋人が自分を裏切り従兄弟と交際していることを知った木場勇治は、異形の怪物オルフェノクに変身し、従兄弟と恋人を手にかけてしまう。醜悪な肉体変貌と犯した罪に絶望する彼の前にスマートレディという女性が現れ、事の真相を告げられる。木場勇治は一度の死亡により、オルフェノクとして覚醒したのだった。スマートレディが属するオルフェノクの組織スマートブレイン社に囲い込まれた木場勇治は、同じようにオルフェノクとして覚醒した長田結花と海堂直也の二人と行動を共にするうちに、人類を敵視するスマートブレインの姿勢に反発し、人類とオルフェノクの融和を考え始める。乾巧と木場勇治の2人の物語を中心に、ベルトを、ひいては人類の未来を巡って、オルフェノクと人類の戦いが始める。」

作者『ファイズは僕も見たことがあります。変身に携帯を利用するライダーです。そして皆様お馴染みの猫舌たつくんですよね。』

永夢「最初の情報はともかく後のやつ要りますか…?」

作者『要りますよ！ 仮面ライダーファイズ乾巧⇨猫舌ですから、ジオウでもちゃんと猫舌たつくん出たんですから!』

永夢「はあ…それでは次の平成仮面ライダーにいきましょう」

作者『まだ言いたいこと有るのに……』

永夢「五代目平成仮面ライダーは仮面ライダー剣です。」

作者『仮面ライダー剣はトランプをモチーフとして、キャッチコピーは「今、その

力が全開する。」「運命の切札をつかみ取れ!」です。人類基盤史研究所《BOARD》。

そこでは「ヒトが地球を制した背景には、進化論で説明できない理由が存在する」との

仮定のもと、その理由を究明するために作られた機関で、彼らは研究対象の不死の生命

体・アンデッドを様々な生物の祖であるとする。だが3年前、アンデッドの大半の封印

が解かれ、人間を襲い始める。BOARDは所長・烏丸啓の指揮の下、アンデッドを「ラ

ウズカード」へと封印すべく、アンデッドの能力を応用した特殊装備「ライダーシス

テム」を開発する。BOARDの新人職員・剣崎一真仮面ライダー剣は、先輩の橘朔也仮

面ライダーギヤレンと協力してアンデッドの封印を行うが、ある日、BOARDはアン

デッドの攻撃で壊滅し、橘は不可解な失踪を遂げる。剣崎は生き残った研究員・広瀬菜

とともに、仮面ライダーの取材を試みていたライター・白井虎太郎の家に居候し、個人

的にアンデッド討伐を続ける。そして戦いの中、剣崎は相川始仮面ライダーカリスと遭

遇する。カリスはBOARDが開発したシステムではなく、始の正体はどうやらアン

デッドと気付く。始は人間を軽んじる一方で、彼が身を寄せる栗原親子のことは気遣う

様子を見せる。剣崎は当惑しつつ、始を静観することに決める。』

永夢「僕は、劍崎さんとはお会いしたことがあります。」

作者『例の黎斗の件ですね。仮面ライダー剣はカードを使って変身し戦いますが、そんな劍崎の代名詞と言えばオンドウル語ですね。』

永夢「何ですか……それ……?」

作者『1話の時に劍崎に「本当に裏切ったんですか!？」というセリフがあつたんですが、滑舌が悪かったから「オンドウルラギツタンデイスカー!？」に聞こえた事が由来です。』

永夢「へえ……」

作者『後、3話における橘さんの「俺の身体は、ボロボロだ!!」というセリフも「オデノカラダハボドボドダ!!」と聞こえます。』

永夢「なんとも言えない……」

作者『それじゃあ次行こうか』

永夢「はい……」

作者『六代目平成ライダーは仮面ライダー響鬼です。』

永夢「キャッチコピーは「ぼくたちには、ヒーローがいる」です。日本には、古来

“鬼”と呼ばれる者たちがいた。そして人間でありながら超人的な能力を持つ彼らは、魔化魍と呼ばれる妖怪の類から人々を守っていた。そして鬼をサポートする人々の

体系は組織へ発展し、猛士と呼ばれるようになった。2005年、高校受験を目前に控えた安達明日夢は、母の実家の法事で屋久島に向かう船上で、船から転落した男児を助ける男を見る。それを見て驚く明日夢に男は「鍛えてますから」とだけ言い残して立ち去っていったのだった。島を散策しに出た明日夢は、原生林の中で怪物に襲われるが窮地の明日夢の前に再び船上の男・ヒビキが現れる。ヒビキは音叉を顔の前にかざすと、全身が炎につつまれ鬼の姿に変身、怪物に立ち向かっていった。」

作者『響鬼はベルトを使わずに変身する異色の仮面ライダーですね。』

永夢「それにしても…どんな鍛え方をしてるんでしょう…?」

作者『一言で言えば人には無理な鍛え方だね。』

永夢「え…?」

作者『永夢がやったら100%死ぬかも』

永夢「…次…、行きましょう…」

作者『さて、七代目平成ライダーは仮面ライダーカブトです。』

永夢「キャッチコピーは「天の道を往き、総てを司る!」です。1999年10月19日、地球に飛来し渋谷に落下した巨大隕石によりその周辺地域は壊滅した。そして7年後の2006年、人間を殺害しその人間に擬態する宇宙生命体・ワームが出現する。ワームに対抗するため、人類は秘密組織ZECTを結成し、ワームに対抗するためマス



クドライダーシステムを開発する。そんなある日、ZECTの見習い隊員・加賀美新は、自らを「天の道を往き、総てを司る男」と称する妙な男・天道総司と出会う。その頃ワームが出没し、追い詰められていくZECT隊員たちを見た加賀美はライダーになって戦うことを決意しベルトを装着するが、カプトゼクターは加賀美ではなく、天道の手に納まった。天道は何故か持っていたライダーベルトにカプトゼクターをセットして変身、仮面ライダーカプトとなり戦うのであった。」

作者『カプトは龍騎以来の本格的なライダー同士での戦いが多かったですね。』

永夢「そうなんですか、僕らも対立はしたけどそこまで戦うことはなかったですが」  
作者『そして、カプト言えば天道の料理。毎回天道が作る料理が美味しそうでお腹が空きます。最早料理番組みたいな回もありましたね。さあ次に行きましょう!!』

永夢「急に!?!」

作者『八代目平成仮面ライダーは仮面ライダー電王、キャッチコピーは「時を超えて俺、参上!」です。2007年の現代に現れ、時間の改編を企てる侵略者イマジンと、時の改編を阻止するために戦う仮面ライダー電王・野上良太郎、そして良太郎に憑依し力を貸す味方イマジン達の活躍を描く。イマジンは憑依した人間との間にその望みをかなえるという「契約」を結び、手段を選ばず「契約完了」することで望みにまつわる記憶を呼び覚ますことで、それを足がかりに過去へ飛び破壊活動を行うことで時間を改

変を行う。イマジンに対抗できる電王に変身できるのは、時間改変の影響を受けない特質の持ち主「特異点」のみ。だが時の列車デンライナーに乗って未来から来た女性ハナが見出した特異点・良太郎はひ弱で気弱、しかも不連続きと一見およそヒーローらしきは一切ない。そんな良太郎に憑依して共に戦うのが、モモタロス・ウラタロス・キンタロス・リュウタロスといった強烈な個性を持ったイマジン達、憑依することで良太郎は能力のみならず性格も一変する。モモタロス達の力と良太郎の奥底にある正しく強い心が合わさることで電王はその力を発揮させ、そして過去へ飛んだイマジンを追って行く。』

永夢「僕が説明する筈だったのに……全部言われた……」

作者『電王が好きだから此処は僕が説明したかったので』

永夢「そんなに好きなんですか？」

作者『はい！一番好きな仮面ライダーです！電王ではイマジンが良太郎に憑依し変身することで様々なフォームチェンジがあります！モモタロスが憑依すると接近型で素早さと手数で圧倒するソードフォームに、ウラタロスが憑依すると中距離白兵戦を得意し水中戦が可能なロッドフォームに、キンタロスが憑依すると防御力を活かして敵の攻撃を受けとめ近接格闘戦を得意とするパワータイプのアックスフォームに、リュウタロスが憑依すると唯一遠距離戦ができ、一方的に攻撃して敵に反撃の隙を与えない戦闘ス

タイトルが特徴のガンフォームになりますよ。』

永夢「多彩なフォームで戦うここから、仮面ライダーのフォームが増えたんですね。」  
 作者『さらば電王では、良太郎に憑依しなくても変身できるのでスーパー戦隊のような全員での変身があつてそれもかっこいいです。』

永夢「長くなりそうなので、次行きましょう。」

作者『まだ言いたい事が沢山あるのに……』

永夢「何時までたつても終わりませんよ！」

作者『はい……九代目平成仮面ライダーはコウモリをモチーフにした仮面ライダーキバです。』

永夢「キャッチコピーは「覚醒（ウエイクアップ）！ 運命（さだめ）の鎖を解き放て!!」です。1986年、世間には人間の姿に化け人間の生命エネルギー・ライフエナジーを吸収し生きるモンスター・ファンガイア族が跳梁跋扈し、それに気づいた数少ない人々がファンガイアと戦いを繰り返していった。ある日、腕利きのファンガイアハンターである麻生ゆりはターゲットであるファンガイアを追い詰めたものの、彼女に惚れたらしい1人の男の乱入により取り逃がしてしまう。ゆりの叱責を気にもせず彼女を口説きに掛かる男の名は、紅音也。天才バイオリニストである彼は、こうしてファンガイアの存在を知ることとなった。それから22年経った2008年。ゴーグルにマス

クという奇妙な姿で、ゴミを漁っては魚の骨を拾って回る怪しげな青年がいた。その彼の名は紅渡。紅音也の息子である彼は、父の遺したバイオリン「ブラッディローズ」を超えるバイオリンを作るためにバイオリン職人として修行を続けていたが、他人との接触を極端に嫌う内気な性格のため彼方此方でトラブルを起こしていた。そんなときに22年前に逃がしたファンガイアが再び出現。ゆりの娘であるファンガイアハンター・麻生恵が戦いを挑むが、その力に圧倒され危機に陥る。その時「ブラッディ・ローズ」の弦が突如として震え始め、それを聞いた渡は本能に突き動かされるようにファンガイアの元に向かう。奇妙な姿をしたコウモリ・キバットが渡に噛み付いた瞬間渡の身体は鎧に包まれ、仮面ライダーキバへと変貌を遂げた。こうして、父と息子、22年にわたる運命の物語は幕を開ける。」

作者『実はキバは見ていなくて説明が出来ません……』

永夢「それでも頑張ってくださいよ！」

作者『え、キバで電王同様に多彩なフォームもあるのが特徴でフォームチェンジのさいに武器が変わります。以上です。』

永夢「しつかりしてください！」

作者『見てないから、しようがないでしょーが！』

永夢「はあ…次行きましょうか」

作者『十代目平成仮面ライダーは現在放送中の仮面ライダージオウにも登場中の仮面ライダーディケイドです。』

永夢「キャッチコピーは「全てを破壊し、全てを繋げ!」です。2009年光夏海は無数の仮面ライダーが「1人の標的」ディケイド」に総攻撃を仕掛けて全滅するという夢を何度も繰り返し見ておりうなされていた。現実に戻れば家業の「光写真館」に居候している青年・門矢士がきちんと写真を撮らないと客から苦情を受け、謝罪と士への説教をする毎日そんな中ある日、突如世界のあちこちで謎のオーロラと共に現れた無数の怪人が、人々を襲い始めた。夏海と離れ離れになった士は謎の青年・紅渡と接触し、自分がディケイドと呼ばれる仮面ライダーであることを知らされた。夏海と合流した士は、彼女が見つけたバツクルで仮面ライダーディケイドに変身して怪人たちを倒すが、世界の崩壊は止まらなかつた。士は再び現れた渡により、それぞれの仮面ライダーが戦う9つの並行世界が1つに融合し、最終的に崩壊しようとしているということ、そして士は9つの世界を旅してそれを防ぐ使命を課せられた存在だということ、告げられる。こうして士は自分の写せる世界を探すために、夏海は夢で見たディケイドへの不安から、異世界への旅に出ることを決意する。」

作者『仮面ライダーディケイドの特徴は歴代平成ライダーに変身することでその力を使うことが出来るのが特徴ですね。』

永夢 「歴代の平成ライダーに変身：凄いですね。」

作者 『当時はクウガからキバまでだったけど、今のジオウではダブルからビルドまで変身可能になっていきますね。』

永夢 「今ではさらにパワーアップしたと言うことですね。」

作者 『最早一人だけ次元が違うけどね。ってことで今回はここまで！』

永夢 「えっ?! まだ半分僕達平成二期ライダーが残っていますよ！」

作者 『長くなるので、今回はここまでです。次回は豪華なゲストを二名お呼びして御送りします。それではまた次回』

永夢 「無視ですか!?!」

（ see you next game ）